

**2011年度
活動報告書**

The Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for Liberal Arts

2011年度 活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for Liberal Arts

はじめに

学問の源泉は読書としなやかな精神の働き、 そして様々な工夫にあり。

教養研究センター所長 不破有理

あの時、日吉キャンパスの来往舎1階の事務室には人があふれていました。あたりは停電となり、これほどの暗闇が現代の日吉という場所に存在するのかという不可思議な思いと、これほどの暗闇を引き起こす事態が理解できない不安な状況でした。そのような時、来往舎の事務室だけは非常電源装置によって煌々と光が灯り、人が集まっていたのです。地震の被害状況はまだ把握できず、交通機関の情報も断片的にしか届かず、待つしか手がありません。その折に校正をしていたのが、教養研究センターの新しいパンフレットでした。冒頭には福澤先生のことば「人事進歩して真理に達するの路は、ただ異説争論の際にまぎるの一法あるのみ」(『学問のすゝめ』15編)を引用しています。込めた思いは世の中の常識に疑問を投げかける異論のすゝめです。情報の批判的受容の上に未来を創造する、すなわち創造は伝統の批判的継承の上に成り立つと考えたからです。あの時から1年以上が過ぎた現在の日本。はからずも唱えた異論のすゝめは、ますますそのことばの重みを増しているように思います。混迷する社会を乗り切るために多様な価値観を理解し、自ら考え、自ら確かめ、「異論」をあえて表現できる学生を育てたい。情報を見極める眼力を養い、ことばと精緻に向き合い、身体に還元し、そして批判を創造に変えて社会に伝えたい。そのために、どのような教育モデルが可能なのか。明治7年という140年近い前に福澤先生は教育の在り方について明快に語っていらっしゃいます。

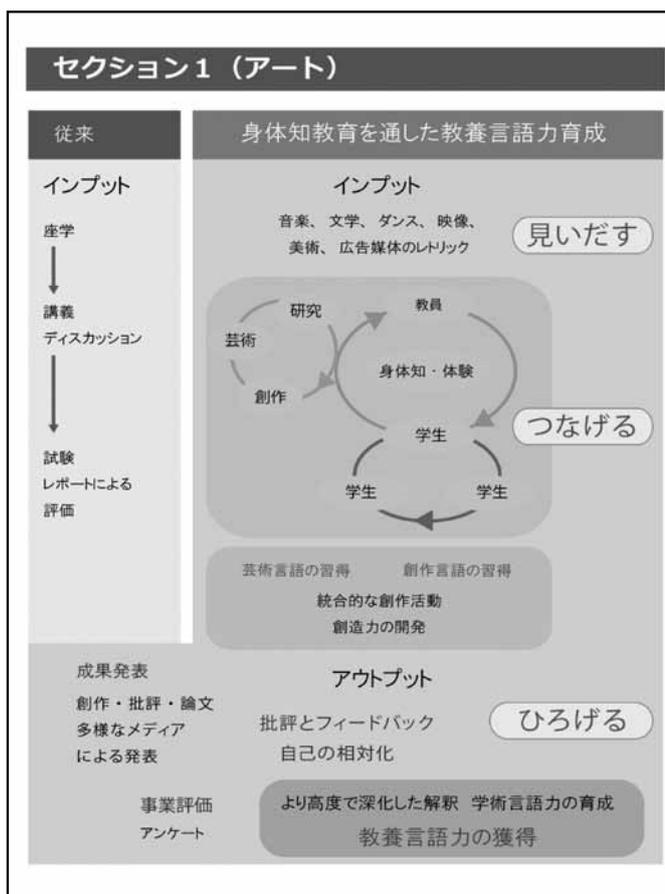
学問の本趣意とは読書にのみに非ずして精神の働きに在り。この働きを活用して実地に施すには
様々な工夫なかるべからず。『学問のすゝめ』12編

福澤先生は学問すなわち学びには読書と精神の働き、そして「様々な工夫」が必要であると説いています。様々な工夫とは、「事物を視察すること(オブセルウェーション)」、「事物の道理を推究して自分の説をつくること(リーゾニング)」、加えて読書を重ね、議論や口頭発表を尽くして、初めて学問をする人と言うべし、と説明しています。つまり、受身の読みによる知識の蓄積では学問にはならず、批判的に精神を働かせて知識を取り入れること。能動的な「読み」の必要性を説いているのです。さらに知識を取り入れるだけでは十分ではなく、発表して世に問うことが必要なのだと言っています。現代に置き換えれば、多様なメディアを介して流れ込む情報を批判的に取り入れ、事象を観察し課題を見出し、推論を実証していくこと、その上で文献の収集を行い、討論や発表を通じて検証していく。場合によってはさらなる仮説の検証の入り口に立つことにもなるでしょう。学びとはこの循環を機能させることだと思います。繰り返し問い続け修正をしていくことによって、考える力が深まり、創造的な考えを生み出すことにつながると考えています。3年にわたる文部科学省の大学教育推進プログラム教育GPの取り組みの中でも同様の実感を抱くことができました。次頁の図は、教育GPのアート・セクションの成果をまとめた学びの循環図です。従来型との対照で一目瞭然なのは、学びの各局面において多様なチャンネルが準備されていることです。学ぶ回路は教員から学生へという上下の一方通行ではないことも特

徴的です。

教養研究センターが設置している科目「アカデミック・スキルズ」は複数教員が担当し、学生へ教え合うことによって互いの教育観や学問手法を共有し合う場です。ゼミではありませんので学生諸君が関心を抱くテーマも十人十色です。1、2年生という大学での学びの入り口に立ったばかりの学生諸君にどのように知的基盤を築いてもらうのか、その道りに踏み出してもらうために、専門も所属も異なる教員が通常3人で知恵を出し合います。ゴールは明快です。論文執筆と口頭発表という最終ゴールが年度末に設定されています。教員とクラスの仲間が一年間共に走り続けるのです。学生の数だけ多様なテーマや疑問が噴出するため、教員も学生も容易ではありません。学期末のプレゼンテーション・コンペティションでは、他のクラスの教員からの、ときに厳しい質問にも答えなければなりません。これは日経産業新聞(2012年3月13日)でもとりあげられた点ですが、論文を書きあげる際に求められる忍耐力は知的基礎力^{かなめ}をつける要となるでしょう。人生においてもしかり。社会で生き抜くためには、観察し、感応し、発見した課題を話し合い、調査をすることで解決策を粘り強く見い出していく。不変の営為です。アカデミック・スキルズが目指し、実践している内容は、福澤先生が『学問のすゝめ』で明確に掲げた学問の趣意と照応しているのです。

電気を失った闇を経験した文明のなかで光を照らし続ける存在でありたい、と述べるのはおこがましいかもしれませんが。一人、一組織だけで可能なことではありません。2012年7月に開所10年を迎えた教養研究センターができることは課題をみだし、つなげ、成果を広げていくことです。複眼思考は一人のみならず、様々な人との対話を通して多様な見方が容易となります。人をみだし、さまざまな人と人をつなげ、知をつなげていくことで、それまで見えなかったことが見出される、そのような交感の場、知恵を交換する場をはぐくんでいます。協力をしてくれる教員同士、学生同士、教員と学生が学び合う稀有の授業作りを実践しています。この教育プログラムには、年度ごとの差異はあるものの、すべてのキャンパスの学部学生が参加しています。慶應義塾の学問の源泉を支える教育として、これからも教養研究センターは研究を続け、教育の現場に還元していきたいと考えています。皆様のさらなるご理解とご協力を仰ぐ次第です。



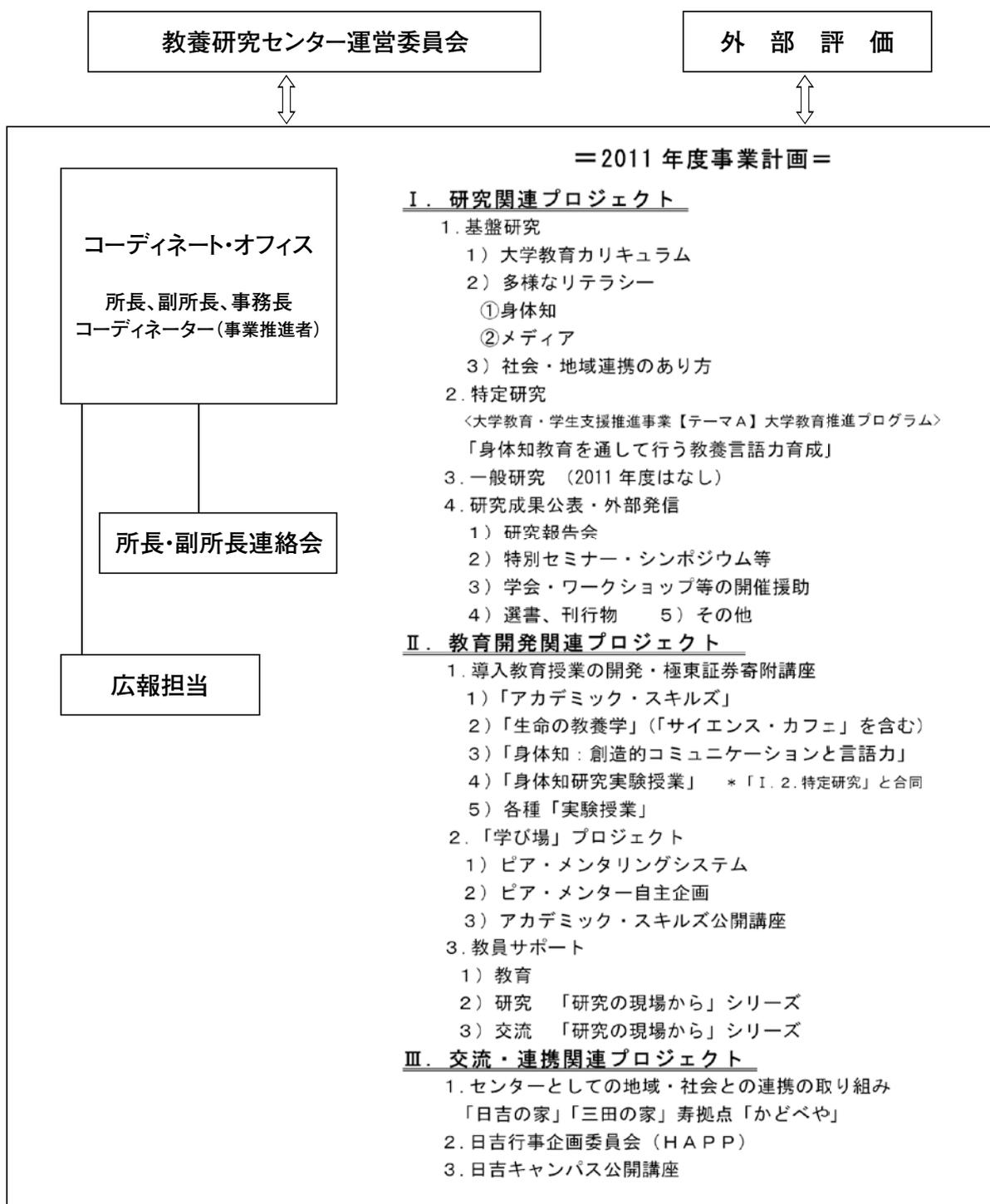
文部科学省大学教育推進プログラム【テーマA】
(教育 GP「身体知教育を通した教養言語力育成」のプログラムを通して得られた学びから評価への循環を図示化しました。)

目 次

はじめに	03
組織構成と事業計画（2011年度）	06
2011年度事業報告	07
広報・発信	10
I 研究関連プロジェクト	
1 文科省大学教育推進プログラム【テーマA】（教育GP） 身体知教育を通して行う教養言語力育成	13
2 カリキュラム研究	14
3 多様なリテラシー	15
4 社会地域連携	17
II 教育開発関連プロジェクト	
1-1 身体知プロジェクト	18
1-2 アカデミック・スキルズ	19
2 ピア・メンタリング	20
3 生命の教養学	21
4 サイエンス・カフェ	22
5 エディティング・スキルズ	23
6 教員のためのサポート	24
7 研究の現場から	25
III 交流・連携関連プロジェクト	
1 三田の家	26
2 カドベヤ	27
3 日吉行事企画委員会（HAPP）	28
4 日吉キャンパス公開講座運営委員会	30
資料編	
1 教養研究センター運営委員会委員	32
2 教養研究センター組織構成員	33
3 2011年度の主な活動記録	34

※ I～IIIの分類は機能カテゴリーであり、センター内部の組織ではありません。1つのプロジェクトが複数のカテゴリーに属することはありますが、本報告書では便宜上、各プロジェクトを3つのカテゴリーのいずれかにまとめました。

大学教養研究センター組織構成と事業計画(2011年度)



コーディネート・オフィスは、運営委員会の付託を受けて教養研究センターの日常的な活動を執行する機関です。約20名のコーディネーターから構成されています。 所長・副所長・事務スタッフに加え、教養研究センターの極めて多彩なプログラムを統括する代表や中心メンバー、学部や関連研究所からのメンバーが加わっています。教職一体での運営というのが教養研究センター設立からの理念ですが、これを実行しているのがコーディネート・オフィスです。

教養研究センターは2009年度から本格的にプロジェクト主体の組織となり、より機動性のある組織として多くの活動を展開している。本センターの活動は1. 研究、2. 教育開発、3. 交流・連携関連に大別される。活動の詳細は各報告項目を参照していただきたい。

3月11日の東日本大震災を経た年度の運営で、前年から基盤研究として掲げた研究プロジェクトの「メディア・リテラシー」がはしなくも問われる年となった。新たな学びのメソッドの必要性を再確認させられた1年であった。

1. 研究

本センターの活動は基盤研究と特定研究があり、基盤研究においては「大学教育カリキュラム研究」、「多様なリテラシー研究」、「社会・地域連携のあり方」を実施した。「大学教育カリキュラム研究」の研究プロジェクトでは2010年に実施した導入教育や教養教育にかかわる教員へのアンケート結果をまとめ分析した。その結果、キャンパス間の意識の差異はあるものの、今後の大学で重要な教養教育は「考える力・価値判断ができる力」を陶冶することの回答が80%を超えた。また目指すべき英語力として「論文の読解力」とする答えが多かったのは、語学力としてのみならず論理力・深い理解力を求める志向が強いことがわかる。本センターが設置する科目「アカデミック・スキルズ」では論文作成を通して考える力の基礎を学ぶ場を提供しているが、今回のアンケートはセンターの取り組みを後押しする結果となった。アンケート結果の分析は冊子にまとめられ刊行された。「多様なリテラシー研究」は①身体知と②メディアを通したリテラシーを身につける教育プログラムを構築する試みである。2011年度の「身体知」を通したリテラシーは、特定研究の大学教育推進プログラム「身体知教育を通して行う教養言語力育成」（2009年度採択文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】略称：教育GP）と連動して、様々なプロジェクトが実施された。

2010年から正規授業となった「身体知——創造的コミュニケーションと言語力」は夏季の集中講座形式を採用し、2011年は現代詩を題材として、作品解釈を種々の身体ワークショップ（朗読、ダンス、歩行など）に繋げて、言語芸術の総合的体験を通じて、主として芸術言語力の育成を行った。通学課程

と通信教育課程の双方が履修して一緒に授業を作ってゆく新しい試みがおこなわれ、アンケートには身体や情動を巻き込んだ形での授業運営の有効性が示されている。

古典を題材として身体を用いて教養言語力を体得する試みは2011年度も教育GPの助成を得ながら実施された。テニソンの「シャロットの女」シリーズでは学生による精度の高い作品が「アーサー王創作文庫」として結実し、「シェイクスピアをあそぼう」シリーズではオクスフォード大学のニール・マクリン氏や義塾OGの美舟ノア氏を招きクリスマスにふさわしい『十二夜』の英語によるワークショップを開催した。五感を用いて解釈し演じ、英語のリズムを体得した熱気あふれる二日間となった（2011年12月23、24日、横山千晶、不破有理企画）。さらに特筆すべき催しは「筑前琵琶と語りの世界—音の力、ことばの力—」（2011年10月28日、井奥成彦、吉田恭子企画）である。プロの筑前琵琶奏者川村旭芳さんによる琵琶の弾き語りと解説を通して、学生らに口承文芸の本質を知ってもらうとともに、人を感動させる表現力とはなにかを問う企画である。プログラムに加え、川村旭芳さんの寄稿もある、琵琶と口承文学に関する冊子を作成した。「筑前琵琶」は文字と声と楽器の音を融合させることで成立する楽器で、音の持つ力を観客共々体感した。音の持つ力を教育に生かそうとする試みは、詩の朗読企画にもみられた。授業「文学——読書から朗読、そして創作へ」（吉田恭子担当）では声のもつ力を朗読者と視聴者の内的意識を覚醒させ、朗読することによって、新たな文学理解を得、さらにそれをきっかけに学生自らの言語表現を促すことに成功した。

このようにさまざまな授業を通した教育手法の取り組みが、多くの教員の創意工夫と献身、そしてそれに呼応した学生諸君によって教養研究センターを出発点として創発されている。より言語に鋭敏に、主体的に関わる学びの場を醸成しようとする動きが目覚しい歩みを示し始めているといえる。

本センターの研究の特長は実験授業を通して、教育への還元を意図している点である。身体知としての音楽教育を考えるプロジェクトも進行した。恒例の横浜市との大学連携コンサートや成果発表演奏会は2011年11月23日・27日にフランスにおけるバロック期の音楽作品マラン・マレによるトリオ・ソナタとジャン・バティスト・リュリの器楽作品を演

奏、2012年1月5日と2012年1月7日(佐藤望、石井明担当)にはバッハの口短調ミサ曲をすべて演奏し、聴衆を魅了した。歴史的音楽の身体的体験・実践を通じて、歴史文化の理解とより高度な教養言語力の育成を目指す本実験授業は、2012年から住友生命保険寄附講座(5年間)としてセンター設置科目「身体知・音楽」として始動することになった。センターの教員相互の研究支援と情報の交換を促す動きも2011年度は本格化した。教員企画の学会・ワークショップ支援への申請数は認知度の高まりとともに伸びている。また自由な雰囲気の中で研究を語っていただく企画「研究の現場から」も春1回、秋2回のペースで開催され、和やか、かつ闊達な議論の場となっている。

2. 教育開発

身体知を通じた言語力育成の理論化と実践の試みは教育GPの支援を得ることで多様な活動を行った。その中で、実験授業やワークショップごとに実施したアンケート結果から教育開発への事例の収集と示唆を得られることができた。教育GPの取り組みに関わることで醸成された教育方法への関心は予想外の企画をきっかけとして次年度への活動の方向性が定まることとなった。

社会・地域連携を通じた情報共有の場を設けるセミナーを連続して開催する中で、湘南藤沢キャンパスの飯盛義徳准教授や、システム・デザイン・マネジメント(SDM)研究科の前野隆司教授や保井俊之特別招聘教授との情報交換の中から、学びそのものの方法論を構築し、当センター設置のアカデミック・スキルズへの援用も可能となるのではないかとの予感が共有され、研究会を開催する運びとなった。その結果、2012年度には公開セミナーを開催しながら、ケースメソッドとシステムデザインを人文科学分野の研究と教育へ応用する事例を収集し発表していくこととした。かなり画期的な教育方法の実験となることが期待される。

既存の科目については、極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズ」の拡充にむけて2010年の後半から本センター事務長柴田浩平氏の発案により開始した広報方針を2011年度も踏襲した。各学部と学生部へ依頼してアカデミック・スキルズ紹介の資料を新入生向けに配布、多くのポスターの掲示を経て、オリエンテーション参加者数は前年度と同様200名

を超え履修者も書類審査を経て定員となった。昨年度作成のプロモーション映像 YouTube へのアクセスが3月から4月に急増するというデータもあり(柴田事務長調べ)、慶應義塾に入学を決める高校生・受験生諸君への啓蒙活動に貢献するものと期待している。

アカデミック・スキルズIII・IVの一クラスでは教育GPの取り組みの一環として、村上春樹の短編を脚本化し、さらに映像化するという教育プログラムを試行した。初年度ながらその結果は豪日交流基金助成・オーストラリア学会主催シンポジウム「多文化社会におけるマルチテラシー」(2011年7月2日、佐藤元状、坂倉杏介担当)の発表論文としてまとめられた。様々なメディアを活用した教育(マルチテラシー)の可能性を示唆する内容で、2012年度も同様の試みを授業内で実施し、教育プログラム構築をめざす。

またアカデミック・スキルズの修了学生たちが後輩にレポートの書き方などの相談に対応するシステム、ピアメンター制度「学習相談」も実施された。全国でもほとんど例を見ない画期的なシステムだが、2010年度は相談件数が伸び悩みという問題があったため、実態分析と対策を練った。その結果、2011年前半は大震災の影響でレポート課題が増えたこととも相まり相談件数を伸ばすことができた。相談内容をさらに分析し今後の活動の方針を検討していく。ピアメンを務めた学生諸君による「ノート」の展示が好評であったことから、2012年度には日吉図書館の協力を得ながら、さらにピアメン学生自身の企画展示を通して、レポートの執筆のための問題提起をしながら、学習相談員の経験をもとにアカデミック・スキルズ・シリーズの刊行物の出版をめざすこととなった。さらにセンター開所10年企画として論文コンテストを主催する予定で、コンテストへの参加を広く塾生に参加を呼び掛けることにより、学びの立体的なトレーニングの場を提供することを目指す。

3. 交流・連携関連

2011年度の活動のひとつは2010年度に教育GPとして大きな基盤を築いたキャンパス外の拠点を発信源とする活動である。横浜市寿を拠点とする「カドベヤ」では「動く教室」として身体知教育の展開をおこなった(詳細は各項目を参照)。キャンパス内外

に創造された教育の場を継承にしつつ、キャンパス間交流にも力を入れた。慶應義塾はキャンパスごとの特色と文化があるので相互乗り入れが難しい場合もあるが、教養研究センターならではの活動として、慶應義塾の知の統合をめざした。社会地域連携については日吉キャンパス協生館にある社会地域連携室の協力も仰ぎつつ、各キャンパスの取り組みの紹介と交流を行い、センターが常に目指す新しい教育の手法の示唆をえる場にもなったことは上記2. 教育開発でも述べた通りである。三田のキャンパス外に設けられた「三田の家」はここ数年、慶應義塾 150 年記念事業「未来先導基金」の助成も受け、三田商店街や港区と連携をすすめてきた。2011 年度は「三田の家：21 世紀的學生街の創出に向けて」と題して學生有志と三田商店街振興組合の方々の協力を得て、三田の地域に新たな文化と交流をもたらすべく 2006 年からの活動をさらに発展させた。キャンパスの中では実現不可能な「家」という空間で、曜日毎に教員が分担して研究会や留學生と日本人學生の交流の場をとりもった。地域住民との共同企画も年間を通して実施した。教養研究センターは学部や組織から抜け落ちてしまいがちな活動にも目を向ける教員の熱意に支えられている。その熱意によって學生がさまざまな体験を重ね成長する手助けをしているのである。庄内セミナーは 2010 年度の応募者減少の反省に基づき、1 年間見送ることになった。しかしながら 2012 年度は未来先導基金を得て、原点回帰のう え内容を見直して再開する。

(不破有理)

2011年度は文部科学省の「大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム」に採択された慶應義塾大学「身体知教育を通して行う教養言語力育成」事業（以下「教育GP」）の最終年であった。総括の報告書は2012年度発行となるがウェブ上で活動の軌跡が閲覧できるので参照して頂きたい。

■ 教育GPウェブページ

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/gp/>

■ 教養研究センター刊行物紹介のページ

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/journal/index.html>

■ 慶應義塾大学出版会ウェブページ

<http://www.keio-up.co.jp/>

極東証券寄附講座関連の書籍と教養研究センター選書については慶應義塾大学出版会ウェブページで書誌情報閲覧および購入が可能である。それ以外の教養研究センター刊行物は学生相談室関連のものをのぞいては、すべて当センターのウェブページで閲覧が可能なので、センターの活動に興味のある方々に塾内外で周知をいただきたい。

1. Newsletter（ニューズレター）

主に日吉所属の教職員とセンター所員への広報が目的のNewsletterは年2回刊行で、毎回テーマカラーを変えているが、不破所長になってから、観音開きのページ構成が定着した。

■ 18号 2011年5月13日発行

特集として目を引くのは「教育GP最終年度へ向けて」。5つのセクションリーダーがそれぞれのプロジェクトを紹介し抱負を述べている。サブ特集「研究と教育も」は、3名の教員によるミニエッセー。

■ 19号 2011年11月30日発行

19号では2003年から継続してきた基盤研究「カリキュラム研究」が全キャンパスの大学教員を対象に行ったアンケート調査の集計結果が簡潔にまとめられている。その他「社会・地域連携セミナー」「身体知とメディアを通じた多様なリテラシー教育」についての報告が掲載されている。

2. CLAアーカイブズ及び

教養研究センター Report

2011年度2冊刊行されたCLAアーカイブズはどちらも学生相談室主催の教員サポートの会の報告書となっているため、教員サポートシリーズのもう

一つの冊子とともにここにまとめる。学生相談室については24ページの報告も参照して頂きたい。

■ アーカイブズ 25 「教員サポート 8 学生相談室から垣間見る昨今の慶應生の姿—同質集団の中の孤独—」 2011年04月28日発行

■ アーカイブズ 26 「教員サポート 10 学生相談室と支持的アプローチ—社会で生きる力、人とつながること、遊ぶことに向けてのサポート—」 2012年03月30日発行

■ Report No.18 「教員サポート 9 日吉 ITC 情報ネットワーク環境の変更説明会 旧アカウント（日吉 ITC 情報ネットワークアカウント）から新アカウント（ITC アカウント）へ」 2012年02月06日発行

3. 報告書

■ 「教養研究センター 2010 年度活動報告書」 2011年7月29日発行

■ 「第一回 社会・地域連携セミナー：大学教育と社会・地域連携のあり方を考える——教養研究センターのこれまでの取組の意義と課題——」 2011年9月30日発行

■ 「第二回 社会・地域連携セミナー：なぜ SFC から学生主導の地域連携プロジェクトが次々と生まれるか？」 2012年1月17日発行

■ 「第三回 社会・地域連携セミナー：大学教育と社会地域連携のありかたを考える」 2012年3月30日発行

センターは2011年度3度の「社会・地域連携セミナー」を主催し、三田、SFC、日吉それぞれの地区におけるケーススタディを通してソーシャルコミットメントの新たな可能性を探った。

4. 極東証券寄附講座関連

■ 「アカデミック・スキルズ学生論文集」

2005年度より毎年刊行されている「アカデミック・スキルズ学生論文集」は、センターが活動の中心に置く少人数制授業「アカデミック・スキルズ」で提出された論文を学生自ら編集し刊行したもの。2011年度より英語で論文を書きプレゼンテーションをする英語版アカデミック・スキルズが加わり、論文集にも英語論文が掲載されるようになった。

■ 「生命の教養学」

2010年度のテーマは「文系と理系の『異形』をめぐる

る対話」であった。文系からは妖怪研究で著名な文化人類学者・小松和彦氏、理系からは発生生物学者・上野直人氏を招いて刺激的な講義となった。詳細は21ページを参照していただきたい。

5. 教養研究センター選書

教養研究センター選書は表紙デザインがマイナーチェンジし、新たに2冊が加わって、通算12冊となった。どちらも発行日は2012年3月31日。今後選書は紙媒体に加えて電子書籍化されることがシリーズ方針となった。

■石原あえか編著『産む身体を描く——ドイツ・イギリスの近代産科医と解剖図』

近代産科発祥時に重要な役割を果たした「解剖図」をめぐって、ドイツとイギリスにおける芸術と科学の関係性を論じた文化論となっている。

■熊倉敬聡著『汎瞑想——もう一つの生活、もう一つの文明へ』

日常的行為を意識的に行うという「汎瞑想」を通じて、新たな価値観を見だし現代社会再生の可能性を探る。

(吉田恭子)

2011年度教養研究センター

刊行物一覧



2010年度活動報告書
(2011.7.29 発行)



Newsletter18号
(2011.5.13 発行)



Newsletter19号
(2011.11.30 発行)



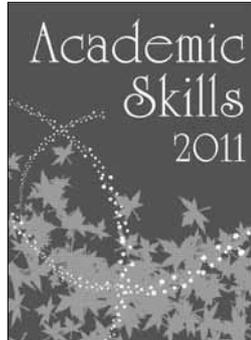
教養研究センター選書 11
『産む身体を描く——ドイツ・イギリスの近代産科医と解剖図』
(2012.3.31 発行)



教養研究センター選書 12
『汎瞑想——もう一つの生活、もう一つの文明へ』
(2012.3.31 発行)



2010年度極東証券寄附講座
「生命の教養学」講義集
(2011.10.31 発行)



2011年度アカデミック・スキルズ
学生論文集
(2012.3.31 発行)



CLA アーカイブズ 25
(2011.4.28 発行)



CLA アーカイブズ 26
(2012.3.30 発行)



教養研究センター Report No.18
(2012.2.6 発行)

I 研究関連プロジェクト

1 文科省大学教育推進プログラム 【テーマA】(教育GP)

身体知教育を通して行う教養 言語力育成

本センターを連携拠点として2009年度から2011年度にかけて実施した文科省大学教育推進プログラム(通称「教育GP」)「身体知教育を通して行う教養言語力育成」が終了した。この取組では、本センターを中心として開発した身体知教育(身体的気づきを導く体験型授業)のノウハウを活用し、5つのセッション(I「アート」、II「フィールドアクティビティ」、III「コミュニティ」、IV「コミュニケーション」、V「発信・評価・システムデザイン」)に分かれて多彩な身体知教育を行うことで、優秀な大学生にふさわしい言葉の力=教養言語力を習得させる教育モデルを構築した。以下、3年間の総括を行う。

1年目は「準備と始動」の年として、次のような活動を行った。

- ①基礎ワークショップの開催：1)身体知教育を通して教養言語教育ワークショップ、2)対人・対自己意識の育成を行う臨床心理学系基礎ワークショップ、3)フィールドワーク技法のワークショップ、4)編集スキルのワークショップなどを開催した。
- ②実験授業の開始：1)アート系とコミュニケーション系の実験授業を開始し、2)上記ワークショップの導入によるフィールドワーク系授業(商学部「地域との対話」など)の充実化を図り、3)雑誌・新聞作りの実験授業を開始した。
- ③拠点作りと交流の開始：大学キャンパス(三田、日吉、矢上、鶴岡)、横浜市日吉地域、横浜市寿町、港区三田、高山の各拠点や身体知関連組織との連携活動を活性化させた。専門家を招聘し、主として教員を対象とした講演とワークショップを開催した。全体シンポジウム「身体知と言語」を開催し、本取組の内容を紹介した。
- ④ウェブサイト：ウェブサイト(<http://lib-arts.keio.ac.jp/gp/>)を立ち上げた。

2年目は「本格的活動と成果の発表」をテーマとして、多くの授業内実験、実験授業、ワークショップを実施することで、活動を本格化させ、教養言語の3つの柱「学術言語」、「芸術言語」、「メディア言語」の言語力育成のための教育方法を開発した。本取組関連の正規授業として「身体知」および映像批評と映像創作を組み合わせた「アカデミック・スキルズIII、IV」を新たに立ち上げた。

- ①授業内取組・実験授業の本格化：授業内実験、実験授業、ワークショップの本格的展開を図った。1)セッションIでは、文学、演劇、音楽など芸術を

用いた言語教育を行い、2)セッションIIでは、首都圏、横浜市日吉、横浜市寿町、地方(川崎市、高山市)を拠点とするフィールド活動を通じた言語教育を行い、3)セッションIIIでは、三田地域、日吉地域、寿町を拠点とするコミュニティ作りを核とする言語教育を行い、4)セッションIVでは、アートに加えて臨床心理学系ワークショップを活用した言語教育を行い、5)セッションV(発信のためのメディア言語)は、編集基礎スキル、本作り、雑誌・新聞作り、著作権問題の対処法などを体験的に学ばせる言語教育を行った。

- ②評価方法の試行：「身体・言語・文化デザイン研究会」を開催し、評価メソッドを改善した。
- ③拠点を繋ぐネットワーク構築と交流の活発化：国内・国際学会での成果発信を行い、専門家を招聘して講演会と意見交換を行った。
- ④中間報告会と成果発信：年度末に中間報告会を実施し、外部評価委員による外部評価を行った。その他、取組内プロジェクト単位で、成果発表(口頭発表、論文集、創作集、新聞・雑誌編集、イベント企画)を行った。

3年目は「発展的継続と最終提言」を主目的とし、実験授業をさらに発展的に展開しながら、本取組の成果発信とカリキュラム化を念頭に置いて、最終提言を行った。正規授業としてフィールドワークを中心とした新「アカデミック・スキルズIII、IV」を立ち上げた。

- ①身体知教育による教養言語力育成モデルの提示：2年目で本格化した実験授業を引き続き展開しつつ、振り返りを行って、体験による気づきを促す身体知教育による教養言語力育成モデルを構築・提示した。
- ②身体知教育および言語教育の評価方法モデルの提示：身体知教育と教養言語教育にふさわしい評価モデルを提示した。
- ③最終成果の発信：学会で本取組成果を発表する他、年度末に、最終報告会を開催し、外部評価を行うとともに、最終報告書の作成を行った。3人の外部評価委員からは、「A」、「A」、「A-」の総合評価をいただいた。

詳細については、最終報告書をご覧いただきたい。教養研究センターウェブサイトからもダウンロード可能となっている。

(武藤浩史)

2 カリキュラム研究

慶應義塾大学の教育カリキュラム研究

教養研究センターの基盤研究においては、これまで慶應義塾大学で実施されているカリキュラムについて、日吉での教育を中心にしながらさまざまな観点から検討してきた。2010年度以降、本研究の成果をひとつの契機にして2008年度に設置された「学部共通カリキュラム委員会」および「日吉カリキュラム検討委員会」が、本格的な活動を始めたことを受け、慶應義塾における教育に関するさまざまなデータの提供等で今後の日吉のカリキュラムの充実を側面支援できるような活動に重点をおいてきた。

昨年度2010年度にはカリキュラムについての教員の意識を知るためのアンケート調査を実施したが、それを受けて、2011年度はその集計作業と、分析、そのデータを提示したシンポジウムの開催、報告書の作成を主な活動とした。

アンケートでは、1) 教養教育の目的、2) 講義要項・シラバスについて、3) 成績評価について、4) クラス編成と学生レベルについて、5) 授業運営について、6) 授業評価について、7) カリキュラム編成・クラス編成について、8) 半期制について、9) 自由記述、9つのカテゴリーに分けられ59の質問を設け、最終的に204名より回答を得た(回収率30.04%)。

2011年7月に7月11日に、来往舎シンポジウムスペースにて、アンケート結果の発表と、それに基づいた今後の提言について話し合うシンポジウムを開催した。佐藤望(商学部)がアンケート調査についての概要を発表し、木島伸彦(商学部)が自由記述の解析結果やとりわけ授業評価の問題について、石井明(経済学部)が日吉カリキュラム検討委員会の中・長期の展望について発表を行った。ディスカッサントとして、金田一真澄(理工学部)、長谷山彰常任理事が加わり、今後の日吉における教育のあり方や、授業評価について論議を行った。発表および論議の内容は、シンポジウム報告書『慶應義塾大学の教育カリキュラム研究③ これていいのか? 日吉のカリキュラム— 授業評価・半期制…カリキュラムに関する教員アンケート2011結果から』として公表している。

その後、シンポジウムの内容を受けての最終報告書の作成に着手した。報告書では、アンケートの解析結果をなるべく詳細に提示することにし、それをふまえてのいくつかの提言を行っている。報告書『慶應義塾大学の教育カリキュラム研究— 「2010年度大

学カリキュラムに関する教員アンケート調査」の結果とそれに基づく提言』の内容は、以下の通りである。

第1章でまず、本研究会がこれまで行ってきた調査・研究活動をふり返り、今期2010/11年度に、カリキュラムに関するアンケート調査を、慶應義塾大学の教員を対象に行った背景、意義について述べている。

次に、第2章では、慶應義塾大学の教員を対象に行った「2010年度大学カリキュラムに関するアンケート調査」の中から、特徴的なデータを取り上げ、分析した。大学教育の意義として具体的なスキルとともに、とりわけ「考える力・価値判断能力」を養うことを重視することや、成績評価のあり方、授業評価のあり方についての、教員の考え方が明らかになっていることについて述べた。

第3章では、慶應義塾大学の教員を対象に行った「2010年度大学カリキュラムに関するアンケート調査」では、自由記述の項目を多く設けた。そして、アンケート調査に回答した多くの教員が、非常に熱心にこの自由記述の項目に記入した。その多量の記述内容を、独自の方法で解析し、項目選択のパーセンテージには現れない大学教育やカリキュラムに関する教員の思いの一端を、明らかにすることを試み、本章では、その解析結果を提示した。

最後に第4章では、最終章である本章では、慶應義塾大学の教員を対象に行った「2010年度大学カリキュラムに関するアンケート調査」の結果を総括した。研究会では、それをふまえて、今後、慶應義塾大学の教育、とりわけ日吉キャンパスを中心とする教養教育にどのように活かしていけるかを論議した。その内容を、ここに将来に向けての提言として提示した。執筆は、佐藤望、木島伸彦、佐々木美帆が分担した。

研究会は、6月、11月に開催し、今年度は、研究報告書作成の年であり、メールを使って論議する方法を多く用いた。

2011年度は、以下のメンバーで研究会の活動を行った。佐藤望(商学部・音楽・座長・幹事)、木島伸彦(商学部・心理学・幹事)、佐々木美帆(商学部・英語・幹事)、木俣章(法学部・フランス語)、近藤明彦(体育研究所)、坂本光(文学部・英語)、武藤浩史(法学部・英語)、村越貴代美(経済学部・中国語)、不破有理(所長)、種村和史(副所長)、大出敦(副所長)、吉田恭子(副所長)

(佐藤 望)

3 多様なリテラシー

多様なリテラシーをめざして

2009年度から2011年度に実施された教育GPはその課題名「身体知を通じた教養言語力の育成」が明示しているように、その中心コンセプトは身体知である。昨今では、なおざりにされがちな五感を用いてテキストを読み、体験を通してテキストを身体化させていく学習をさまざまな手法で実践した。さらに教養研究センターが設置する科目が増えていることに鑑み、あらためてセンターが向かうべき教育の在り方を議論するために提案されたコンセプトが、多様なリテラシーである。慶應義塾が送り出す学生像への問題意識が教育GPにおける「身体知」の提示であったように、3.11以降、さらに教育のありかたを模索する必要性が前景化されたといってもよい。身体知を中心とした学ぶテキストに向き合うリテラシーの取り組みは教育GPの項目で紹介されているので、そちらを参照されたい。

リテラシー・セミナー：

多様なリテラシーを目指して

第1回 2011年10月5日

「メディア・リテラシーとは：その定義、分析ツールと教授法、評価方法の可能性」

講師：不破有理(経済学部)

メディア・リテラシーは歴史的には1960年代から70年代にテキスト批評においてクリティカルな読みを評価する解釈学的な研究に始まり、70年代には映画の心理分析、80年代の読者論研究という研究動向の変化に呼応し、以後メディアの読み手という視点からの研究が中心となる。さらに、読み手から創り手への視線を保有することによって、創り側の意図を読み込む、能動的読み手の育成の重要性がとくにイギリスやカナダなどの教育現場で説かれるようになった。現代の日本では辞書によってもメディア・リテラシーの定義はまちまちである。レン・マスターマンの定義によれば、メディア・リテラシーの基本概念は、分析のためのツールであり、読み手のクリティカルな主体性を養うことを目的としている。教養研究センターがめざす教育のコンセプトにメディア・リテラシーの分析方法が適応できるか、センターとしてどのような多様なリテラシーを志向すべきかという点について、ブレインストーミングの場として第1回のセミナーが開催された。メディア・リテラシーにはメディアが「再構成した現実」を読み

解くという前提があり、そうであれば、どのように再構成されているのか、その意味を問う姿勢は学びの基本的な態度に通底していくのではないかと考えられる。学びは当然ながら読み、書くことが基本である。「読む」ことは、読み手の読書や体験によって形成された知識の基盤・記憶を目の前のテキストと照応させ、意味を創る行為である。読み手の基盤が広ければ広いほど多様な読みを可能にするわけで、学生が論文執筆の際に直面するテーマ設定のむずかしさは、読む体験と現実の観察眼とに相関があるのではないかと考えられる。「現実」というテキストが再構成されているのであれば、どのような価値観で誰のために何の目的で構成されているのか、その意味を考える回路を設定するメディア・リテラシーの学習は、考える力を養うために効果が期待できるかもしれない。表層テキストから一枚ずつ掘り下げる読みを繰り返し、文脈、視点によって異なる読みを見せるテキストは、単純な二項対立を崩す力をもつであろう。このような手法を用いるテキスト分析は複眼的思考の陶冶に役立つはずである。またメディア・リテラシーを養う学習段階として通常、受容、活用、表現(創作)という3つの能力を問うと言われている。文字・非文字の媒体を通して受容される情報をまず批判的に分析する能力は論文作成の際に求められる先行研究の確認とも照合することになるであろう。センターが設置する科目の充実と共に、その運営方法、内容についての共通理解や今後の方向性を含めたカリキュラム議論の端緒とすべく本セミナーでの問題提起を行った。

第2回 2011年11月4日

「メディア・リテラシーとリベラル・アーツ」

講師：松浦良充(文学部)

「リベラル・アーツ」は古代ギリシアが起源という、教養教育の歴史的流れを論ずる際に引用される「定説」を修正するところから講義は始まった。概念としては古代ギリシアに存在せず、むしろ、リベラル・アーツの教育には、古代ローマの弁論家の系譜として社会の指導者となる市民のために古典テキストを教える系統と、哲学者の理念として知性や理性に基づく自由で批判的な懐疑主義をすすめ、個人の意思による知的探求をめざす理念をかかげる二つの系譜があるという。教養研究センターが今後、どのような教育をめざしていくべきなのか、松浦先生のお話

を起点としてさまざまな討議がなされた。狭義のメディア・リテラシーである「情報リテラシー」において、学生が陥りがちな情報収集の過ちや、多様化するメディアを用いた教育方法とその課題の接近方法への議論や、他方、情報を分析する「読み方」としてのクリティカル・リテラシーの方向性を探る意見もだされた。リテラシーには機能的、文化的、批判的という三分類があり、機能的リテラシーは基本的な生活をおくるために必要な読み書き能力であり、文化的リテラシーは技能ではなく、読み書きに必要な背景知識の習得による理解をめざすもので、それぞれ歴史的なリテラシー論議の中で生まれた考えである。批判的リテラシーは公的な知識の授与の脱神話化とマイノリティへの差別構造を洞察する力として20世紀後半に、潜在する現実を「意識化」させるためのリテラシーとして唱えられた。それぞれセンターが探る教育のありかたを示唆する「リテラシー」である。狭義のメディア・リテラシーのためのセミナーと広く教育のメソッドを考える研究会について、2012年度の事業計画においても反映することとなった。

(不破有理)

4 社会地域連携セミナー

教養研究センターは、社会地域連携のノウハウと実績を持つメンバーを所員として多数擁し、さまざまな社会地域連携活動を行い豊かな実績を挙げてきた。また、教養研究センター以外にも、日吉の教員の手によって数多くユニークな社会地域連携活動が行われており、日吉キャンパスは、慶應義塾の中でこの分野において先導的な役割を担っているといえることができる。

一方で、本センターの社会地域連携活動は多くの課題を抱えていることも事実である。個別の活動を貫く、教養研究センターとしての総合的なビジョンがないこと、センターとして各活動を合理的・有機的に組織運営しておらず、個々の所員任せになってしまっていること、情報と経験が十分に共有されていないために、個別の活動ごとの問題解決を余儀なくされ、貴重な時間と労力が費やされていることなどである。さらに、他キャンパスで行われている活動との連携がないこと、膨大な実務的負担のために本センターの他の重要な活動遂行に支障が出ていることなども問題点として指摘しなければならない。

これは、慶應義塾全体の問題としても捉えることができる。現在までのところ、慶應義塾大学においては、社会地域連携を統括するリエゾンオフィスが十分に機能しておらず、各地区・各部門で独自に道を模索しているのが現状である。それぞれの地区、それぞれの組織で展開されている社会地域連携活動は、義塾の他の運営部門と協力することによって、より充実した活動を展開できるであろう。

このような現状認識に立って、本センターは社会地域と連携した教養教育のビジョンを作り上げ、教育プログラムを構築することを中長期的課題として位置づけた。日吉の学生を主たる対象とした、社会地域に開かれた学びの総合的ビジョンと具体的な教育プログラムを作り上げることが目的である。そのために、本センターで行われている社会地域連携活動を全体的に把握し、それぞれの特長を生かしつつ、抱えている問題点を解決していくために、教養研究センターとしてどのような体制を取るべきか、また義塾の関係部門とどのような連携・協力体制を構築していくべきかを考えていきたい。それと同時に、他キャンパスで展開されている社会地域連携活動に対する理解を深め、協力体制の確立も模索したい。

この計画に沿って、本年度は、年間3回の公開セ

ミナーを開催した。

第1回は、2011年7月20日「大学教育と社会・地域連携のあり方を考える—教養研究センターのこれまでの取組みの意義と課題—」と題して、教養研究センターのプロジェクトをはじめ、日吉キャンパスの教員が参画して展開されている社会地域連携活動についての情報交換を行った。報告を通じて、各教員の熱意に支えられて多様な特徴を持った活動が活発に展開している様子を知ることができた。それと同時に、それぞれの活動が、教員の過重な負担、活動の継続性の困難などの問題に直面している実態も明らかになった。

第2回は、2011年10月29日「なぜSFCから学生主導の地域連携プロジェクトが次々と生まれるか?」と題して、金子郁容氏(政策・メディア研究科教授)・飯盛義徳氏(総合政策学部准教授)により、大学教育の既存の枠組みにとらわれない、社会地域と連携した学びの重要性、それをキャンパスとして実現するためのSFCの取り組み、およびそれに基づいた教育の実際について講演が行われた。さらに、飯盛ゼミの学生による研究プロジェクトの報告が行われた。

第3回は、2012年1月26日「大学教育と社会地域連携のありかたを考える」と題して、保井俊之氏(慶應義塾大学先導研究センター「環境共生・安全システムデザイン」の先導拠点」特任教授)により、慶應義塾大学院システムデザイン・マネジメント研究科(SDM)で行われている、システムティックなメソッドであるシステムズ・アプローチに基づいた地域活性化プロジェクトが、和気洋子氏(商学部教授)により、中国東北における環境保全のための植林プロジェクトと福澤文明塾というふたつの取り組みを通じた、専門の枠を越え社会と連携した活動の経験が報告された。

第2・3回のセミナーを通じて、日吉以外のキャンパスで行われている社会地域連携活動の実態を把握することができた。また、今後、個別の活動を慶應義塾全体の活動として継続発展させていくために、他キャンパスと有機的に連携することの可能性、それを支える仕組みを作ることの必要性を認識することができた。

(種村和史)

1-1 身体知プロジェクト

2005年度に発足した「身体知」プロジェクトの成果の1つに、文科省大学教育推進プログラム「身体知教育を通して行う教養言語力育成」の採択（2009年-2011年）があり、もう1つに、それに関連した正規授業「身体知——創造的コミュニケーションと言語力」の立ち上げ（2010年）がある。

2011年度も、武藤浩史、横山千晶、佐藤元状を科目担当講師として、授業「身体知」を、8月11日から17日にかけて、16日（日曜）を除く6日間の夏期集中型で、実施した。通学生だけでなく夏期スクーリング中の通信教育課程学生にも講座を開いて、両者が一緒に、交流しながら、参加・体験型の授業を行った。

テキストは、ビートルズの歌詞を枕としてから、我が国を代表する現代詩人朝吹亮二氏の鮎川信夫賞受賞詩集『まばゆいばかりの』（2010年）から「贈りもの（古いアルバムからの）」を取り上げ、これを精読し、その解釈を議論した後で、芸術言語を体験し身体感覚と感性を磨き言語力とコミュニケーション力と創造力を育む様々な身体ワークショップに繋げて、履修者の心身を共に解放してから、創作活動と成果・創作発表会を行い、最後にその全てを振り返った。時間割は以下の通りである。

8月11日

第3限 インTRODクシヨン

第4限 芸術言語論と作品精読1

8月12日

第3限 作品精読2

第4限 身体感覚ワークショップ

8月13日

第3限 声の身体ワークショップ

第4限 朗読ワークショップ

8月15日

第3限 ダンスワークショップ

第4限 ダンスワークショップ

8月16日

第3限 創作

第4限 創作

8月17日

第3限 成果発表

第4限 創作発表1

第5限 創作発表2

第6限 振り返り

履修学生は、一週間の前半で鍛えた精読力・批評力、中盤で鍛えた身体的感性を用いて、それぞれが、週後半の創作活動において、その潜在力を十二分に発揮した。ストーリーテリングから詩画、創作ダンスに至るまで多彩な作品が揃った。以下、履修者の感想をいくつか転記するとともに、授業アンケートの数値を示す。「自分が少しずつ変わるのが感じられ、少し自信が付きました。短期間でこんなにも多くのものが生み出せ、洗練できることに驚きました」。「体をとにかく動かすことで生まれるものがたくさんあるとわかった」。「生きるということ。人と人が交わるといふ事。その根本について忘れていたものを思い出せたような気がします」。「言葉を身体で表現することが自分にとっては、まったく新しい発見でした」。「参加者同士の一体感、互いに学び合おうとする態度。『言葉』と『身体』にどうアプローチしていけばいいか、そのいくつかのメソッドを提示してくれたという点で発見の連続だった」。「閉じていたものを開放できたような気がし、とても気持ち良かったです。普段の生活でもこの経験を活かし、創作、表現したいと思います」。「通学生と通信生の混合スタイルというのは素晴らしい試みだと思います」。

2011「身体知」履修者アンケート(22名)

A 統計

2011.08.22

1「この授業に満足していますか？」

8月〇日	不満がある	やや不満	まあ満足	満足している	
11	0	0	8	14	
12	0	2	5	15	
13	0	0	4	18	
15	0	0	5	14	3名不参加
16	0	0	4	17	1名不参加
17	0	1	4	17	
全体	0	0	7	15	

2「同種の試みにまた参加したいと思いますか？」

	参加したくない	あまり気が進まない	できれば参加したい	ぜひ参加したい
全体	0	1	10	11

3「参加・体験型の授業を大学教育に積極的に取り入れるのは、教育的または社会的に意義があることだと思いますか？」

	思わない	あまり思わない	どちらかといえば思う	強く思う
全体			7	15

4「言語を用いたコミュニケーション力、交渉力、表現力、発信力などが身につきましたか？」

	思わない	あまり思わない	どちらかといえば思う	強く思う
全体		3	11	8

5あなたの該当する「所属」は何ですか？

通学生	通学生(通信教育課程)	教職員	その他	
10	11	—	—	1名未回答

(武藤浩史)

1-2 アカデミック・スキルズ

2011年度に実施された教養研究センター基盤研究の「授業評価・半期制……カリキュラムに関する教員アンケート」でも「大学で身につけて欲しい具体的な教養とはどのようなことですか」という問いで上位となったのは、「考える力や価値判断力」であった。大学時代に身につけておくべきこの基礎体力を培うために教養研究センターが2005年度より設置しているのが、「アカデミック・スキルズ」である。2011年度は、基礎編「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」3クラス、同「アカデミック・スキルズ(英語)Ⅰ・Ⅱ」1クラス(いずれも通年授業、春学期Ⅰ、秋学期Ⅱ)、中級編「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」3クラス(いずれも通年授業、春学期Ⅲ、秋学期Ⅳ)の合計7クラスが開講された。

「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」は、論文の書き方とプレゼンテーションの基礎を一年間かけて学ぶものである。春学期は論文作成に必要なさまざまなスキル(例えば、主題の立て方、資料の探し方、書式の紹介、引用と剽窃の違いなど)を学び、最終的に4000字の論文を提出することを目標にしている。秋学期は論文作成能力の向上とともに、それを発信するためのプレゼンテーションの技法を学ぶことになり、最終的には8000字の論文と発表で評価される。しかしこうした方針は最終成果物を出すというものを除いては緩やかな申し合わせで、各クラスでは、この方針に沿って独自の取り組みを行ってきた。水曜5時限クラス(担当:原大地、古賀裕章、熊野谷葉子、履修者:22名)は、「多様性と均質性」というテーマで上記の方針に沿った授業運営を行ってきた。木曜5時限クラス(担当:赤江雄一、種村和史、片山杜秀、履修者:24名)と金曜5時限クラス(担当:新井和広、佐藤望、高橋宣也、履修者:24名)は、春学期はディベートを用いて、グループワークからスキルの習得を目指す試みを行った。また2011年度から開講された火曜2時限の「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ(英語)」(担当:篠原俊吾、奥田暁代、迫桂、履修者:9名)は、上記の方針に沿って運営されるという点では「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」と同様だが、最終的な成果物が英語による論文作成・プレゼンテーションであることに特徴がある。これは近年の大学の国際化を受け、早い段階から日本語以外の言語による発信技法の習得を目指すべきという方針で新設されたものである。

一方、「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」は、「アカ

デミック・スキルズⅠ・Ⅱ」をさらに発展させたい学生を対象にして、クラス毎に特化した授業を展開するものである。火曜5時限クラスの「実地調査の手法」(担当:長田進、鈴木亮子、井本由紀、西山敏樹、履修者:5名)は、やはり2011年度から新設された授業である。これも近年の社会調査、フィールドワークといったものに対する学生のニーズから設けられたものである。この授業ではさまざまな調査手法を講義と実習を交えながら学生が社会調査の技法を体得していくものであった。水曜5時限クラスの「批評と創作」(担当:佐藤元状、横山千晶、坂倉杏介、履修者:11名)は、文学テキストのクリティカル・リーディングに基づいてそれを映像化するというユニークな試みを前年度に引き続き行った。木曜5時限クラスの「読書から批評へ」(担当:大出敦、識名章喜、履修者:12名)は、徹底してクリティカル・リーディングを行うことに特化したクラスであった。主として文学テキストを用いたが、社会科学、思想などの文献も取り入れ、どのように本を読むかを模索した。

これらの各クラスでは、秋学期末までにプレゼンテーション優秀者(「アカデミック・スキルズ」Ⅰ・Ⅱは各2名、「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」は1名)を選出し、2012年2月7日に極東証券社長菊池廣之氏を招いて行われたプレゼンテーション・コンペティションで成果を発表し、互いに競い合った。このコンペティションでは、金賞、銀賞、銅賞がそれぞれ1名、奨励賞が6名に授与された。この審査が行われている間、「批評と創作」クラスで制作された映画が上映され、同クラスはコンペティションには参加しなかったものの、成果をやはりこの日に発表できた。またプレゼンテーションとは別に各クラスから優秀な論文も選出され、論文コンテストも行われた。選考の結果、金賞、銀賞がそれぞれ1篇、銅賞が2篇、佳作が6篇となった。論文コンテストの受賞作を含む履修した学生全員の成果である8000字の論文は、『アカデミック・スキルズ学生論文集』(2012年3月刊行)にまとめられている。

(大出 敦)

2 ピア・メンタリング

教養研究センターは、学生の中の学びの連環を形成すること、学びの場としての図書館の役割を見直し必要な整備をすることを目的に、2008年度からメディアセンターとの共同事業「学生の学習環境を整える」プロジェクト(略称「学び場プロジェクト」)を実施している。本プロジェクトの中心的な活動が、「学習相談アワー」である。これは、日吉図書館1階のレファレンスデスクにおいて、学習相談員が大学1、2年生を主な対象としてレポートの書き方・文献調査の方法に関する相談に対応する取り組みである。学習相談員は、教養研究センターの開設科目「アカデミック・スキルズ」を修了した学生の有志が務めている。2011年度は、春学期は5月9日～7月15日、秋学期は10月3日～1月20日(11月18日～24日の三田祭期間と12月28日～1月5日の冬季休業期間を除く)の2期にわたって行われた。原則として、月曜日から金曜日までの13:00から18:00までの時間帯である。学習相談員は計10名(うち女性3名)、その内訳は博士課程1名、修士課程1名(他大学大学院在籍を含む)・学部4年4名・同3年3名・同2年1名であり、所属学部は文・経・法・商にわたる(ただし、実際に学習相談アワーのシフトに入った学生は8名)。

本年度春学期は、相談件数の大幅な増加が見られた。この原因として、東日本大震災による電力不足対策としての学事日程の変更が考えられる。今年度春学期は、節電に伴う計画停電対策のため、4月末から授業が始まったために大学の学習に慣れる前にレポート課題が課された。また、春学期期末試験期間が短縮されたことにより、学期末レポートによる成績評価をする科目が例年より増加した。そのために、レポート作成のノウハウを知りたいという需要が増加したと思われる。秋学期の相談件数が例年より微増に止まったことも、これを裏付ける。

春学期の相談件数の異例の増加こそあったものの、全体的な傾向としては、相談件数は伸び悩んでおり、これを解決することが本活動の最重要課題である。これは本活動の認知度の低さや実施期間・時間などの制約という理由もあるが、根本原因としては、多くの学生が自分たちの学習の成果をよいレポートにまとめ上げることの意義を認識していないということが挙げられる。学習相談アワーのさらなる広報活動の展開とともに、より充実した学びへの欲求を学生に喚起するための啓蒙活動を行うことが

重要である。このような認識の上で、ピアメンターはいくつかの取り組みを行っている。

学習相談員を身近な存在と認識してもらうための工夫として、Twitterを活用している。レポートの書き方、学習の方法はもとより読書の感想など、ピアメンターが様々な情報をTwitterで発信することで、そのパーソナリティに触れてもらい、学習相談の敷居を低くしてもらおうというねらいである。現状では、これが学習相談アワーの相談件数の増加に反映されているかは未知数であるが、今後継続的に行っていくことで効果を期待したい。また、今後もさまざまな回路を活用して、学習相談員アワーの存在を多くの学生に認知してもらう努力を続けていきたい。

学部1、2年生に、大学で充実した学習を行うための有用な情報を提供する目的で、日吉図書館1階メインカウンター前の展示ケースにおいて、学習相談員による自主展示企画を行っている。2011年度は、春学期に「これからの『ノート』の話をしよう——塾生のノート拝見——」(6月1日～7月2日)、秋学期に「失敗から学ぶレポート作法」(11月28日～12月22日)の企画展示を行った。前者は大学の授業を主体的に受けるためのノートの取り方として優れた方法を解説する企画である。学習相談員が実際の授業ノートをタイプ別に分け、ノートテイキングのポイントをわかりやすく解説しながら展示を行った。後者は、問題のあるレポートの典型例を展示し、その問題点を指摘することによって、逆説的にあるべきレポートの書き方を示すという企画である。展示したレポートは、問題のレベル別にピアメンターが作成した。両企画とも、図書館を訪れた学生の多くが足を止め展示に見入っており、ノートテイキング・レポート作成に対する学生の関心の高さが窺われた。今後も、学習相談員自身の企画により、よりよい学びの提案を様々な形で実施していく計画である。

(種村和史)

3 生命の教養学

2011年度の「生命の教養学」は、前年の構成にならって、理系・生物学系から一人、文系から一人、それぞれの領域で傑出した仕事をしてきた学者を招き、ある主題について授業をしてもらう理系と文系の対話という形式を継承した。これは、2010年度に実施された生物学者の上野直人・人類学者の小松和彦の両講師による「異形」をめぐる対話形式の授業において、理系と文系の双方の視点が同一の問題について出会う論点が次々と出てくるスリリングなものになり、コーディネイターたちはこの方式に確かな手ごたえを感じていたからである。

2011年度の主題は、「共生」ということになった。「共生」という言葉は、もともとは二種類の異なった生物が生きることという生物学上の現象をあらわすタームであると同時に、純粋な生物学用語としてではなく、社会のありかたや価値観についての意味合いを持つ言葉になっている。国語辞典は、「共生」の拡大した意味として「生あるものは、互いにその存在を認めあって、ともに生きるべきこと」という道徳的な意義や社会の価値観と言える語義を挙げている。この「ともに生きるべきこと」という理念は、近年脚光を浴びている学問領域である障害学の中心にある概念である。さらに、そもそも生物学的な意味での共生という概念には、生物多様性や地球環境保護などの理念にもかかわる、狭義の生物学の問題にとどまらない、21世紀の国際社会が取り組むべき課題の一つと深くかかわりあっている。「共生」は、理系と文系の双方の学問領域において、知的に新しく社会的に重要な問題にかかわっていくときの中心の概念のひとつであるからである。

スピーカーの選定は、それぞれの領域で重要な仕事を発表してきた研究者ということで、比較的すんなりと決まった。理系からは、産業技術研究所の深津武馬(ふかつ・たけま)氏。深津氏は、昆虫類における多様な微生物との共生関係を中心にして、寄生、生殖操作、形態操作、社会性などの高度な生物間相互作用をとまなう生物現象について主導的な研究をしてきた研究者である。一方、文系からは、東京大学の市野川容孝氏。市野川氏は社会学者であり、優生学、身体論、そして障害学といった問題について重要な著作を矢継ぎ早に発表してきた。二人の講師から快諾を得たのち、東大駒場で慶應側のコーディネイター2名(鈴木晃仁・鈴木忠)とともに、合計4名で打ち合わせと内容のすり合わせを2時間ほ

どにわたって行った。

5月14日には深津先生による集中講義が行われた。時限としては合計5時限の設定で、1時限から順に「共生と生物進化」「共生細菌による宿主昆虫の体色変化」「共生微生物を利用した害虫制御」「兵隊アブラムシ」という四つの主題が説明され、5時限目はディスカッションとレポート執筆にあてられた。その一週間後の5月21日には、市野川先生による集中講義となり、同じようなスケジュールで、1時限から「遺伝子診断を考える」「出生前診断を考える」「ナチズムと医学」「尊厳死・安楽死を考える」という主題についての授業が行われ、5時限目にはディスカッションが行われた。市野川先生の授業の一週間後、慶應側のコーディネイターである鈴木晃仁と鈴木忠が、それぞれ1時限ずつのまとめと発展の授業を行い、ディスカッションのあとでレポートを執筆して終了した。これらの講義の内容は、例年のごとく、<生命の教養学>のシリーズとして書籍化される予定である。

最後に、2010年度、2011年度にわたって行われた「対話」という形式についての反省を記すべきであろう。この形式は、オムニバス形式とは異なったスタイルを模索する中で生まれたものであり、理系と文系の間に濃密な関係を持たせ、相互に関連する講義を提供する試みであった。私たちが狙っていたものを達成できたし、その内容についても、コーディネイターたちは自負を持っている。しかし、そのために選んだ土曜日集中講義という授業形式は、通常の授業が提供されている枠組みとはあまりにも異なったものであり、履修して出席した学生たちの間からさえ、違和感を訴える声が聞かれた。この方式は、企画としては確かに得るものもあったが、通常の日程の中に設定される授業であり、そのためには一定の履修者を集めることが必要であることを考えると、長く固執するべきではないと判断した。2012年度には、もとのオムニバス形式に戻ったうえでの新企画が組まれている。

(鈴木晃仁)

飲み物を片手に、気軽なスタイルでサイエンス談義に混じることのできるカフェ。日吉キャンパス来往舎の「サイエンス・カフェ」は、極東証券寄付講座『生命の教養学』の公開講座という位置づけで2007年初夏に開店した。当初からこちらが期待した通り、子供のお客様もかなり多く、大学の講義などではなかなか見られないような大変活発な質疑応答がある。このカフェで話題提供をする話し手にとっては、子供にもわかるような話し方を工夫する良い機会ともなるし、また、思いもかけない質問を受ける貴重な体験の場となっている。相互に良い刺激を与えるこのカフェの活動によって、大学で行われている研究活動が少しでも社会に還元され、特に次代を担う若い伸びやかな頭脳にとって良い時間空間となることを期待している。

「通りがかりにちょっと寄ってみたいカフェ」であることを目指し、第10回までは事前申し込み不要としていたが、準備の都合上、第11回からはなるべく事前の連絡をお願いすることになり、その後、参加希望者がどんどん増加したため、ついに第14回からは定員を明示することになった。このように参加受付に関しては開店当初の気軽さがやや失われたが、それでも相変わらずカフェを開けば繁盛し、

お客様には喜んで頂いている。

2011年の3月には日本動物学会の関東支部大会が日吉で開催されることになり、その中の「動物学ひろば」をカフェの代わりとして宣伝していたが、開催前日の3月11日、大地震が日吉キャンパスにも襲来し、中止となった。そのままサイエンスカフェはしばらく休業となり、2011年度は10月に一度だけの開業となった。この責任はひとえに、すっかり怠惰になってしまったカフェマスターのせいである。

第22回 「カメムシのおかあさんの置き土産

～母から子へ伝えられる腸内細菌のひみつ～

2011年10月22日

細川貴弘 (産業技術総合研究所・博士研究員)

嫌なニオイを出す嫌われものカメムシ。実はカメムシ達はお腹の中にある腸内細菌の力を借りて生きており、この腸内細菌は母虫から子虫へと受け継がれていきます。いったいどのようにして受け継がれているのでしょうか??

参加人数：28名

(鈴木 忠)



22回サイエンス・カフェのポスター



22回サイエンス・カフェの様子

5 エディティング・スキルズ

エディティング・スキルズは「本づくり」の企画、取材、執筆、造本、さらに流通にまでいたる行程を体験的に学び、編集にかかわる総合的な言語力を養うことを目的とするプロジェクトである。

春学期のテーマはDTP (Desktop Publishing)と「手づくり本」。DTPは現代の本づくりの常識である以上、コンピュータ上の編集作業を学ぶことはもちろん必修である。しかし担当者たちは、本という古典的メディアの豊かな可能性を知る出発点として「原始的な」本の手触りも学生たちに体験してほしいと考えた。そこでDTPの授業と並行して専門家による製本教室を開き、1人1冊の「手づくり本」の制作をおこなった。

秋学期は、春学期に学んだ知識と技術を活かして、実際にさまざまな刊行物の編集に取り組んだ。とくに本年は学園祭(三田祭)に参加し、一般の来場者にも成果を披露できたことは、学生たちにとってよい刺激となったことだろう。また日吉の生協書籍部と協力してブックフェアを企画・立案したが、これは学生の意識を「本づくり」の過程の最後まで、つまり本を読者の手に届けるところまで向けることに役立ったはずである。

2年半の活動を経たいま、「本づくり」のさまざまな局面がいかにも多くの学びの機会となりうるかをあらためて実感している。いうまでもなくその教育的効果は大きい。しかしこのプロジェクトの最終目標である言語力の向上という観点に立つと、わたしたちの活動がかならずしも満足できる結果をもたらしたとはいえない。たとえば、編集をおこなう者として、素材となる原稿にたいして——文章の内容自体について、日本語の文章作成法について——もっと批判的な目を養うべきではなかったか。活動の場が日吉キャンパスに限定されるために、長期的な指導のプログラムを組むことがむずかしいという事情があるにせよ(特に受講生の多くを占めた文学部生は2年次から三田キャンパスに移る)、今後でも何らかの形でこの実験授業を継続するのであれば、DTPや造本といった技術的な指導だけでなく、学生の知的能力を広範囲に開花させるべく、より緻密なカリキュラムの検討が必要となるだろう。

以下は2011年度の主な活動の記録である。

- ・4月：受講説明会。
- ・5月：小磯勝人(慶應義塾大学出版会)による編集

の基礎とDTPの講座。

- ・5-6月：豆本作家・田中葉氏による製本教室。
- ・11月：学園祭(三田祭)に参加。手づくり本を展示し、前年度に編集したキャンパス雑誌『ばら☆ばら』を配布。
- ・1-3月：キャンパス雑誌『BARA BARA』新入生歓迎号、法学部設置科目「人文科学特論」(朝吹・笠井担当)受講生の詩集『三〇四(サンマルヨン)]を編集。ブックフェア「雨の日に室内で楽しめる本——晴耕雨読」を企画・立案(2012年6月に日吉生協書籍売場で開催)。

エディティング・スキルズのWebサイト：
editingskills.net

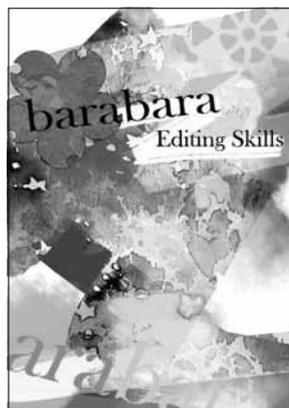
<担当者>

笠井裕之(法学部)、大出敦(法学部)、吉田恭子(文学部)、小磯勝人(慶應義塾大学出版会)

(笠井裕之)



田中葉氏による製本教室



『BARA BARA』新入生歓迎号

6 教員のためのサポート

1 リテラシーワークショップ

慶應義塾には、大学教育を取り巻く環境の変化に対応し、高度な教育研究活動をサポートするための施設および知識と経験が様々な部署、様々な人材の中に蓄積されている。しかし、情報の共有が充分でないためにそれらが教員に十分に生かされていないのが現状である。このような状況に鑑み、教養研究センターでは、「教員サポート」を開催し、研究教育に資する様々な知識とスキルを紹介している。

日吉メディアセンターは図書と各種データベースなどの提供によって、日吉 ITC はネットワーク環境の整備と維持によって、日吉の教職員の教育・研究活動を支えている。この2つの組織のサービスに対する教職員の理解を深め、積極的な利用を促進することを目的として「リテラシーワークショップ」シリーズを行っている。本年は2回のワークショップが開催された。

慶應義塾大学のメディアセンターは、全国屈指の蔵書量を誇るとともに、様々なサービスを展開している。とりわけ、メディアセンターが提供するデータベースは、質の高い教育と研究を行う上で大きな貢献を果たしている。4月22日「メディアセンター・サービス活用術——慶應の教員になられた方に——」と題して、柴田由紀子氏(日吉メディアセンター係主任)により、新任の教職員を主な対象として、日吉メディアセンターの施設とサービス、およびデータベースの使い方について説明された。併せて、大学1・2年生に対する教育の参考として、学生向けのデータベースや日吉図書館でみる学生の様子が紹介された。

日吉 ITC で発行していた日吉 ITC 情報ネットワークアカウントは2012年3月末日をもって、利用サービスを停止し、ITC アカウントに移行した。同一アカウントで4キャンパス共通に ITC システムの利用を可能にし利便性を向上させることが目的である。これに伴い、メールサービス・個人 WEB ページの公開など、教員向けのサービスにも変更が生じることがある。このことについて、10月11日、作山央氏(日吉 ITC)を講師として、「日吉 ITC 情報ネットワーク環境の変更説明会」が開催された。

(種村和史)

2 学生相談室

近年、社会の変化にともなって学生たちの気質や生活習慣が一昔前とは様変わりしたために、教員としてどのように対応すべきか頭を悩ませることも少なくない。現代の学生がどのような精神状況の中で悩みを抱えているか、義塾のサポート体制はどうなっているかを知ることによって、各教員が学生により適切に接することができるようになる。そのため、「教員サポート」では「学生を知ろう、学生相談室を知ろう」シリーズとして、学生相談室のカウンセラーによる講演会を行っている。本年度は1月20日に、「学生相談室と支持的アプローチ——社会で生きる力、人とつながること、遊ぶことに向けてのサポート——」と題して、学生相談室カウンセラーの秋田恭子氏により、支持的アプローチについてお話しいただいた。

まず、学生相談室におけるカウンセリングの方法として、支持的アプローチが優れることが説明された。カウンセリングにおいてクライアントへの関わり方として、支持的アプローチと並ぶものとして、深層分析を行う表出的アプローチとがあるが、青年期の大学生にとっては自我を一層不安定にしてしまう危険がある。また3年～10年という長期間のカウンセリングを前提とするため、4年間の在学期間をケアする学生相談室には相応しくない。これに対し、クライアントに寄り添い、その不安や苦痛を取り除き、自然に回復して社会に自らを適応していくことを目指す支持的アプローチは、学生が所定期間内に学業を修めることを支援するという学生相談室の使命により合致したものであることが説明された。

その後、セルフ・エスティーム、自我機能、適応スキル、不安の軽減と予防という、支持的アプローチにおける重要概念について説明しながら、支持的アプローチによるクライアントへの関わり方の実際が紹介された。その中で、クライアントをサポートするために相応しい対応の仕方とは何か、どのような点に留意されるべきかという説明は、単にカウンセリングの手法についての知識を得るというに止まらず、教員が学生と接する際にも当てはまるものであり、意義深い内容であった。

(種村和史)

7 研究の現場から

2011年度より不破所長の発案で始まった来往舎の研究者交流サロン「研究の現場から」は、和やかな雰囲気の中で毎回2名の所員が自分の研究を紹介し談話するという企画である。初回より好評で、今や来往舎の定番行事として定着してきた。2011年度の会の概要は以下の通り。

■ 第1回 2011年5月26日開催

講師：大和田俊之(法学部)

「コロンビア大学の教養教育」

片山杜秀(法学部)

「沖縄反戦デーから石油ショックまで—私の原体験と現在」

記念すべき初回は、来往舎が誇る二人の音楽評論家がそろっての会となった。大和田さんはコロンビア大学で90年以上の歴史がある「コア・カリキュラム」、全新生が数々の古典を読み討論するという、人文系教員にとっては夢のような授業を紹介した。片山さんは幼少期の記憶や読書体験に始まり、研究者としての知的好奇心の由来を語る、博物学的自分史ともいえるお話しとなった。

■ 第2回 2011年10月12日開催

講師：山下一夫(理工学部)

「龍と虎を従えた聖者—中国宗教説話研究から」

原大地(商学部)

「詩と教養」

中国文学研究とフランス文学研究のふたりがまったく違うアプローチを語った会であった。山下さんは、中国の聖人伝説でしばしば言及される「龍と虎を従えた聖者」イメージが必ずしも破天荒なものではないことを実証的に解説。とりわけ、龍が特定の種類のワニに推定される箇所は分野横断的で刺激的だった。原さんは難解とされるマラルメの詩を丁寧に読み解く前半部から、平塚らいてうの名マニフェスト「原始、女性は太陽であった」へとつなげて論ずるという後半へと、精読から文学史へ視野が広がる展開が見事な発表だった。

■ 第3回 2012年12月14日開催

講師：吉川龍生(経済学部)

「中国映画のあれこれ」

松田健児(商学部)

「瀧口修造とカタルーニャの芸術家たち」



中国とスペインの文化研究者が登場の第3回、吉川さんは、中国映画の過去と現在、という視点で、1930年代の左翼知識人による映画批判が今日に至るまで中国映画界に及ぼす影響について、毛沢東に批判された『武訓伝』の監督・孫瑜のケースを紹介するとともに、日吉キャンパスで開催している「日吉电影节」というイベントのための奮闘ぶりを語ってくれた。松田さんは、塾とゆかりの深い瀧口修造が、カタルーニャの芸術家たちと親しく交流したことによって、結果的にスペイン芸術の日本での受容のされ方に重要な影響を及ぼしていたことを、さまざまな作品を紹介しながら、解説した。

(吉田恭子)

1 三田の家

「三田の家」プロジェクトは、慶應義塾大学の教員と(元)学生有志などが三田商店街振興組合と共同で運営し、三田の地域社会に新たな文化・交流の萌芽をもたらそうと2006年度より活動してきたプロジェクトである。2011年度主に参加した教員メンバーは、岡原正幸(文学部)、熊倉敬聡(理工学部)、坂倉杏介(グローバルセキュリティ研究所)、武山政直(経済学部)、手塚千鶴子(名誉教授)、塩原良和(法学部)、日向清人(外国語教育センター)。本プロジェクトは、長期的には、慶應義塾と港区の共同事業である「芝の家」プロジェクトとも連携しつつ、大学と地域の協働による21世紀的學生街の創出を目指している。また、本プロジェクトは、創立150年記念未来先導基金の助成を受けている。

2011年度の活動としては、主に以下のことを行った(なお、具体的な活動内容は、いたって多岐に渡るため、数例を挙げるにとどめる。)

- 1) 通常の教室では実現しがたい実験的授業・ワークショップの企画・実施(主に毎火曜日・木曜日・金曜日)。文学部岡原研究会、法学部塩原研究会、文学部授業「芸術の現在」による実験的授業・ワークショップなど。
- 2) 外国人留学生と日本人学生との「小さな国際交流」プログラムの企画・実施(主に毎月曜日)。映画『幸せの経済学』上映会ならびにパネルディスカッション(2011年6月20日、三田キャンパス/三田の家)など。
- 3) 三田商店街ならびに地域住民との共同企画の実施。「第39回三田納涼カーニバル」(2011年7月23日)への参加協力など。

4) 学生が主体となって企画する講演会、展覧会、コンサート、情報発信イベントなどの実施。「カルチュラルタイフーン神戸2011」(2011年7月23・24日、神戸)への岡原研究会の参加(「跳べ!障害とセクシュアリティ」【ビデオ作品+トーク】、NPOノアールとの共催)など。

5) 「芝の家」との共同企画の実施、「三田の家」活動のさらなる広報。『日経グローバル』(2011年7月4日)、『日本経済新聞』(2011年7月5日、夕刊)への取材協力など。

6) 塾内の他の地域連携活動(SFCや日吉等)や塾外と同様の活動との交流プログラムの企画・実施。「大学地域連携の場づくり会議」(2011年9月12日、三田の家)など。

(三田の家 URL: <http://mita.inter-c.org/>)

(熊倉敬聡)



幸福の経済学



カルチュラルタイフーン神戸



大学地域連携の場づくり会議

2 カドベヤ

「カドベヤ」でコトを起こす

オルタナティブ・スペース「カドベヤ」は、文部科学省大学教育推進事業「身体知教育を通して行う教養言語力育成」の社会連携活動の拠点として、2010年4月にコトラボ合同会社と慶應義塾大学により共同で設立された。同年4月から、大学の授業の拠点としてのみならず、6月より毎週火曜日の夕方、からだを動かすこと(ダンス、体操等)、ことばをかけること(詩、手紙の創作等)、ともに食べることでつながる「動く教室」を開催し、近隣の寿地区、石川町の住民、横浜で働く人々、学生など様々なバックグラウンドを持った人たちの交流場として機能してきた。「動く教室」での成果は、慶應義塾大学で開催された二つのダンスイベント、2011年5月11日HAPP「DANCE LIVE 先ず獣身を成して、後に人心を養う」、および2012年3月18日「みちのく伝統文化・伝統芸能支援公演 土海森命」にて発表され、「カドベヤ」で生まれたオリジナルな歌とダンスを披露した。また授業としては法学部人文科学特論「寿プロジェクト」、および法学部人文科学研究会「コ

ミュニティを考える」の拠点としてキャンパス外の教育の場となっている。これらの授業は大学の外に出て、その地域で展開されている活動に積極的に参加することから社会の成り立ちを体で学び、コミュニケーション能力を培うことを目標とする法学部の少人数科目である。文部科学省の教育推進事業が2012年3月末日を持って終了となるのに伴い、2012年以降はコトラボ合同会社がカドベヤの運営を行うこととなった。今後は慶應義塾大学は、他大学とも協力し合って積極的に教育コンテンツを展開していく予定である。また「動く教室」にかかわってきたメンバーは、今後も同活動を「ストレッチと夕めし」と名前を変えてを継続するのみならず、毎週火曜を「カドベヤオープン DAY」とし、より多くの人々が地元の居場所としてカドベヤを活用できる仕組みを考え、創造的な活動をアーティストや地域の人々とともに展開していく予定である。

詳しくは、<http://ameblo.jp/kadobeya2010/> にアクセスしていただきたい。

(横山千晶)



カドベヤ



カドベヤ「動く教室」のひとこま



2011年5月11日HAPP DANCE LIVE「先ず獣身を成して後に人心を養う」ポスター

3 日吉行事企画委員会 (HAPP)

【プロジェクトの内容と目標】

日吉行事企画委員会 (HAPP) は、春の新生歓迎行事、秋の公募企画行事の二本柱によって、2011年度も運営した。新生歓迎セクションは、主として春学期に行う依頼型のプロジェクトで、第一線で活動するアーティストや地域住民を巻き込んだ行事を行っている。一方、公募企画セクションは、主として秋学期に行う塾生・教職員の自主企画を HAPP が後援するものである。新学期早々には公募を開始し、夏休み前には選定を終えている。この際、様々な行事の主催者として、日吉行事企画委員会は、①安全であること、②大学として行う価値のあるものを開催することの2点に常に留意している。但し、2011年度の新入生歓迎行事は、東日本大震災を受けて大幅な日程変更を余儀なくされた。その中でも特筆すべきは、『日吉能、羽衣』である。この公演には、塾長を招き、まず、被災者への黙祷と塾歌斉唱で開始し、地域住民と共に、祈りの場ともなった。入学

式以前の新生歓迎行事であり、計画停電、余震の影響の中、実施自粛を求める意見もあったが、新しい決意をもって震災を乗り越える行事になったと自負している。秋には、春実施できなかった、中国インディペンデント映画の特別企画の他、公募企画としてハンディキャップと身体の関係を考える公募企画、食を考える企画もあり、改めて、身体、生命への関心の深さを感じさせた。

【現在の目標達成度】

日吉行事企画委員会は、年3回、全体会議(6月、12月、1月)を行い、各企画内では、担当委員、事務局、責任者間で頻繁に打ち合わせを行っている。特に2011年度は、あらたにホームページに載せる HAPP の理念も再検討し、次のように改訂した。ホームページを参照してほしい (<http://happ.hc.keio.ac.jp/>)。

NO.	企画名	概要	日程	場所
1	【新生歓迎行事】 日吉能(羽衣)	能公演	4月27日(水) 15:30開場, 16:30開演	来往舎イベントテラス
2	【新生歓迎行事】 黒沢美香&ダンサーズ DANCE LIVE	コンテンポラリーダンサー兼振付家の黒沢美香氏と黒沢美香&ダンサーズによる公演	5月11日(水) 18:18開演	来往舎イベントテラス
3	【新生歓迎行事】 環境週間 2011	環境に関するイベント	6月13日(月)～18日(土)	日吉キャンパス
4	【新生歓迎行事】 室内アンサンブル・フェスタ	室内楽を核とした演奏会と講演会からなるシリーズ	6月中ごろから 7月初めの2週間	来往舎シンポジウムスペースおよび藤原洋記念ホール
5	【公募企画行事】 ブラインドサッカー ワークショップ～五感を生かしたコミュニケーション～ (学生企画)	ブラインドサッカーを利用した連続ワークショップを通じて体験し考える	10月4日(火) 19:00～21:00「環境認知」 10月13日(木) 19:00～21:00「コミュニケーション」 10月20日(木) 19:00～21:00「チャレンジ精神」 10月25日(火) 19:00～21:00「障がい者理解」	来往舎シンポジウムスペース
6	【公募企画行事】 Diverta!! (学生企画)	国内外で活躍するパフォーマーがジャグリング・手品など	10月19日(水)・20日(木) 18:30～19:30	来往舎イベントテラス
7	【新生歓迎行事】 日吉电影节 2011	中国インディペンデント映画の上映と、監督や出演者による公演	12月7日(水)上映 16:30(開場 16:20) 講演場会 18:15～19:45	第4校舎B棟 J19 教室
8	【新生歓迎行事】 塾長と日吉の森を歩こう	塾長と学生がともに日吉の森を散策	12月10日(土)午前	(集合および塾長との交流)、まむし谷(散策)
9	【公募企画行事】 食と農と健康 in 慶應	美味しいと健康をつなぐ講演、展示、パネルディスカッションを実施	12月10日(土) 10:30～15:00	来往舎オープンスペース(1F)

■ HAPP の活動の趣旨 ■

新入生を中心に全学生を対象として、様々な企画を通じて多様な「知」の在り方を提示し、大学のみならず生涯にわたる「学習」の意味と可能性を考える機会を提供することを目指しています。

各種行事は「心と体と頭と…」を総合テーマとして、平成6年度以降、毎年様々なイベントを運営しています。その趣旨は主に以下の3点です。

(1) 知識・言語表現偏重型学習からの脱却：「知」の表現には、言語によるもの、身体によるもの、さらには先端的な技術を用いた表現など多様な形態が存在します。このことを具体的に体験することのできる機会を設けることで、「知」やその「学習」の意味を考えさせるきっかけとなることを目指しています。

(2) 学生・教職員による一体型の活動：学生と教職員が一体となって行事の企画・運営を行うことで、キャンパスや大学への帰属感を高めると共に、一連の共同作業自体を通じて学生による自主的な「学習」体験の場を展開することを目指しています。

(3) 地域・社会への大学・キャンパスの開放：行事を広く地域や社会に開放することで、「地域・社会に開かれた大学・キャンパス」実現の一助とすると共に、学生が地域住民・社会人との直接的な交流を通じて大学以外の世界に対する視野を獲得する貴重な機会となることを目指しています。

(小菅隼人)



2011年4月27日 日吉能(羽衣)



2011年10月4日~25日
ブラインドサッカー ワークショップ



2011年12月10日 食と農と健康 in 慶應

日吉キャンパス公開講座 運営委員会

日吉キャンパス公開講座は、慶應義塾大学日吉キャンパスを中心として、慶應義塾が持つ知的リソースを地域社会に広く公開し還元することを主たる目標としている。2011年度においては大教室を用いての秋学期講座に加え、秋学期講座で取り上げたテーマを少人数授業でさらに深く学ぶためのフォローアップ講習を開講した。詳細は以下の通りである。

【秋期講座】「災害とメディア」

東日本大震災と福島での原発事故を経験して以降、情報の「発信」「伝達」「受容」が自明なプロセスではないこと、しばしば恣意的・誘導的なものであることが改めて実感されている。今講座では今回の災害と事故、また過去の事例がどのように伝えられ理解されたかを多面的に取り上げた。当講座は土曜開講、各回90分×2コマ、全8回、受講申込は全8回セット(受講料8,000円)とし、定員300に対し受講者数218名、修了者数(5回以上出席にて修了証を授与)171名(78.4%)、全回出席者数59名(27%)、平均年齢は64歳(最高齢87歳、最年少17歳)であった。各回の詳細は以下の通り。

10月1日

- 3時限 「地震・津波防災を考える—自然地理学から見た東日本大震災—」
松原彰子(経済学部)
- 4時限 「放射線とメディアリテラシー」
寺沢和洋(医学部)

10月8日

- 3時限 「東日本大震災における精神科医療支援：相馬事件と大震災～二つの事件とメディアの関わり」
加藤隆(医学部)
- 4時限 「災害と人生—文学・美術・報道にみる—」
山本品(名誉教授)

10月15日

- 3時限 「流言飛語と情報統制—思想史の観点から—」
片山杜秀(法学部)
- 4時限 「<3・11>の思想—クリント・イーストウッドの『ヒアアフター』を読み解く—」
佐藤元状(法学部)

10月29日

- 3時限 「大震災から大震災まで—出版史の問題—」
龍澤武(東アジア出版人会議理事、元平凡社取締役編集局長)
- 4時限 「原発報道とジャーナリズム：全国紙の分析から」
山腰修三(メディア・コミュニケーション研究所)

11月5日

- 3時限 「『日本沈没』の未来—小松左京とSF的想像力—」
巽孝之(文学部)
- 4時限 「情報通信時代の災害対策」
小木哲朗(システムデザイン・マネジメント研究科)

11月12日

- 3時限 「中世ヨーロッパのマスメディアは災害をどのように伝えたか—説教と災害の受容—」
赤江雄一(文学部)
- 4時限 「福澤諭吉と災害—『時事新報』記事から考える—」
小室正紀(経済学部)

11月26日

- 3時限 「メディア・リテラシーとリベラル・アーツ」
松浦良充(文学部)
- 4時限 「災害情報の発信者・メディア・受け手の不思議な関係」
広瀬弘忠(災害心理学者、東京女子大学名誉教授)

12月3日

- 3時限 「組織事故防止に向けた安全文化醸成への戦略的取り組み」
高野研一(システムデザイン・マネジメント研究科)
- 4時限 「観光資源としての『奥の細道』—震災後のみちのくで考える—」
津田真由美(経済学部)

【フォローアップ講習】「災害とメディア」

過去の秋学期講座受講者アンケート等に見られる要望に応じて、秋学期講座で取り上げたテーマをより深く、必要に応じ実験・実習等を通して学ぶ少人数講座を開講した。詳細は以下の通り。

① 「放射線とメディアリテラシー」

寺沢和洋(医学部)

12月3日および12月17日に開講、各120分、定員30名、受講料4,000円。

② 「パニックの政治学」

片山杜秀(法学部)

12月10日および12月17日に開講、各120分、定員25名、受講料4,000円。

(坂本 光)

1 教養研究センター 運営委員会委員

2011年4月1日～2012年3月31日在籍者
 第5期(2009年10月1日～2011年9月30日)
 第6期(2011年10月1日～2013年9月30日)

教養研究センター担当常任理事
 長谷山 彰

教養研究センター所長
 不破有理(2010年10月から)

教養研究センター副所長
 種村和史
 吉田恭子(2010年10月から)
 大出 敦(2010年10月から)

教養研究センター事務長
 柴田浩平

文学部長 中川純男(2010年4月14日まで)
 関根 謙(2010年4月15日から)

経済学部長 小室正紀(2011年9月30日まで)
 中村慎助(2011年10月1日から)

法学部長 国分良成(2011年9月30日まで)
 大石 裕(2011年10月1日から)

商学部長 樋口美雄

医学部長 末松 誠

理工学部長 青山藤詞郎

総合政策学部長 國領二郎

環境情報学部長 村井 純

看護医療学部長 太田喜久子

薬学部長 増野匡彦

文学部日吉主任 斎藤太郎

経済学部日吉主任 比留川 彰(2011年9月30日まで)
 青木健一郎(2011年10月1日から)

法学部日吉主任 武藤浩史

商学部日吉主任 成田和信(2011年9月30日まで)

英 知明(2011年10月1日から)

医学部日吉主任 長井孝紀

理工学部日吉主任 金田一真澄

薬学部日吉主任 江原吉博(2011年9月30日まで)

池田年穂(2011年10月1日から)

体育研究所所長 植田史生

日吉メディアセンター所長

羽田 功

外国語教育研究センター所長

境 一三

自然科学研究教育センター所長

青木健一郎(2011年9月30日まで)

大場 茂(2011年10月1日から)

日吉研究室運営委員会委員長

小宮英敏

日吉キャンパス事務長

安田 博

日吉学生部事務長 石井宜明

日吉メディアセンター事務長

風間茂彦

日吉事務運営サービス課長

黒田修生

日吉ITC所長 種村和史

極東証券寄附講座運営委員会委員長

鈴木晃仁

基盤研究(慶應義塾大学の教育カリキュラム研究)座長

佐藤 望

基盤研究(社会・地域連携)代表

羽田 功

2 教養研究センター 組織構成員

2011年4月1日～2012年3月31日

所長：不破有理(経)**副所長**：種村和史(商)

吉田恭子(文)

大出 敦(法)

コーディネーター：坂本 光(文)、長田 進(経)、
境 一三(経)、鈴木晃仁(経)、羽田 功(経)、
武藤浩史(法)、横山千晶(法)、佐藤 望(商)、
金田一真澄(理)、熊倉敬聡(理)、
小菅隼人(理)、
高桑和巳(理・2011年10月1日から)、
前野隆司(SDM研究科)、
安田 博(キャンパス事務長)、
柴田浩平(教養研究センター事務長)

広報担当：吉田恭子(文)**日吉行事企画委員会(HAPP)****委員長**：小菅隼人(理工)

委員：坂本 光(文)、石井 明(経)、不破有理(経)、
下村 裕(法)、佐藤 望(商)、竹内美佳子(商)、
森吉直子(商)、小宮 繁(理)、森 泉(理)、
杉山由希子(理)、石手 靖(体研)、
河邊博史(保セ・2011年12月31日まで)、
徳村光昭(保セ・2012年1月1日から)、
安田 博(キャンパス事務長)、
黒田修生(運営サ)、加賀齊天(運営サ)、
湯川哲史(学生部・2011年5月31日まで)、
河越太郎(学生部・2011年6月1日から)、
屋部 史(学生部)、山崎健二(学生部)、
風間茂彦(日吉メディアセ)、
酒見佳世(日吉メディアセ)、
日本邦昭(教養研究セ)、
岩淵重夫(外国語教育研究セ・2011年5月31日まで)、
富澤英治(外国語教育研究セ・2011年6月1日から)、
大賀 裕(社会・地域連携室・2011年5月31日まで)、
宮尾正敏(社会・地域連携室・2011年6月1日
から2011年10月31日まで)、
尼崎彰男(社会・地域連携室・2011年11月1日から)

極東証券寄附講座運営委員会**委員長**：鈴木晃仁(経)**委員**：不破有理(経)

種村和史(商)

吉田恭子(文)

大出 敦(法)

「生命の教養学」企画委員：赤江雄一(文)、

小瀬村誠治(法)、高橋幸吉(商)、
鈴木 忠(医・2011年9月30日まで)、
小野裕剛(法・2011年10月1日から)、
高桑和巳(理)、鳥海 崇(体研)、
乙子 智(慶大出版会)、
柴田浩平(教養研究センター事務長)

日吉キャンパス公開講座運営委員会**委員長**：坂本 光(文)

委員：新島 進(経)、不破有理(経)、大出 敦(法)、
下村 裕(法)、上村佳孝(商)、寺沢和洋(医)、
荒金直人(理)、前野隆司(SDM研究科)、
佐々木玲子(体研)

教養研究センター事務局

柴田浩平(事務長)、日本邦昭、山口 中、傳 小史

3 2011年度の主な活動記録

Date	Events
4	<p>9日 教育 GP 関連企画「カドベヤ「動く教室：シーズン1」(4月9日～6月28日) 極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズⅠ,Ⅲ」開講(春学期)</p> <p>22日 教員サポート「データベース活用法」 未来先導基金 三田の家「霜田誠二ワークショップ(KO 大学芸術学部オープン会議)」</p> <p>23日 未来先導基金 三田の家「霜田誠二ワークショップ(KO 大学芸術学部オープン会議)」</p> <p>27日 HAPP 新入生歓迎行事「日吉能」</p>
5	<p>7日 教育 GP 関連企画「フラワークショップ「フラと身体・言語表現力」 「学び場プロジェクト」ピア・メンターによる学習相談アワー(7月20日まで)</p> <p>9日 極東証券寄附講座「生命の教養学」(5月14日、21日、28日計3回)</p> <p>14日 教育 GP 関連企画・HAPP 新入生歓迎行事「黒沢美香および黒沢美香&ダンス公演」</p> <p>18日 教育 GP 関連企画「長編映画ワークショップその1」(5月13日～7月13日)</p> <p>19日 未来先導基金 三田の家「Cafe Activism1 (「芸術の現在」)」</p> <p>21日 教育 GP 関連企画「自分との対話、他者との対話をゆたかにするコミュニケーションワークショップⅠ」</p> <p>26日 第1回「研究の現場から」大和田俊之、片山杜秀</p> <p>28日 教育 GP 関連企画「自分との対話、他者との対話をゆたかにするコミュニケーションワークショップⅡ」</p> <p>28日 教育 GP 関連企画「実験授業「エディティング・スキルズ」製本教室Ⅰ」</p>
6	<p>3日 教育 GP 関連企画「熊篠慶彦氏へのインタビュー実践「社会学Ⅰ」」</p> <p>11日 教育 GP 関連企画「芝の家 コミュニティ講座：花づくりで広がる地域の見守り」</p> <p>13日 HAPP 新入生歓迎行事「環境週間」(18日まで)</p> <p>16日 未来先導基金 三田の家「Cafe Activism2 (「芸術の現在」)」</p> <p>17日 教育 GP 関連企画「実験授業「自由研究セミナー：アーサー王伝説解題から創作へ」</p> <p>中旬～ HAPP 新入生歓迎行事「室内アンサンブル・フェスタ」(~7月初旬の2週間)</p> <p>20日 未来先導基金 三田の家「幸せとは何か? : 映画『幸せの経済学』上映&意見交換会」</p> <p>25日 教育 GP 関連企画「実験授業「エディティング・スキルズ」製本教室Ⅰ」</p> <p>25日 教育 GP 関連企画「授業「文学——読書から朗読、そして創作へ——朗読劇ワークショップ「都市日記 慶應日吉キャンパス」(6月25日～7月4日)」</p> <p>30日 未来先導基金 三田の家「Cafe Activism3 (「芸術の現在」)」</p> <p>30日 教育 GP 関連企画「ソーシャルスポーツ・マネジメント「ブラインドサッカーから考えるスポーツの社会的価値」</p>
7	<p>7日 未来先導基金 三田の家「Cafe Activism4 (「芸術の現在」)」</p> <p>11日 教育カリキュラム研究シンポジウム「これでいいのか? 日吉のカリキュラム」</p> <p>11日 教育 GP 関連企画「Hiyoshi Poetry Reading IV : 水に書く・空に書く」(7月11日～14日)</p> <p>16日 教育 GP 関連企画「連続ワークショップ ソーシャライズ! 自分の旗を立てる」(7月16日～2012年1月)</p> <p>19日 教育 GP 関連企画「カドベヤ「動く教室：シーズン2」(7月19日～9月27日)</p> <p>20日 第1回「社会・地域連携セミナー」大学教育と社会・地域連携のあり方を考える 初年次教育学会理事会@関西国際大学尼崎キャンパス</p>
8	<p>5日 教育 GP 関連企画「アカデミック・スキルズ作品上映会」</p> <p>11日 夏季集中講座「身体知 - 創造的コミュニケーションと言語力」(8月18日まで)</p> <p>30日 学会・ワークショップ等開催支援「西洋中世学会若手支援セミナー企画ポスターセッション」</p> <p>30日 学会・ワークショップ等開催支援「フィリップ・ヴァルテール教授講演会」</p> <p>31日 初年次教育学会@久留米大学</p>
9	<p>12日 未来先導基金 三田の家「大学地域連携の場づくり会議」</p> <p>29日 教育 GP 関連企画「授業「日々。生きる文学」(文学Ⅱ)」第1回～第3回(9月29日、10月13日、10月27日)</p>

Date	Events	
10	1日	教育 GP 関連企画「創作のための情報編集術」
	1日	2011 年度キャンパス公開講座「災害とメディア」①(松原彰子、寺沢和洋)
	3日	「学び場プロジェクト」ピア・メンターによる学習相談アワー(1月20日まで)
	4日	HAPP 秋の行事「ブラインドサッカー ワークショップ ～五感を生かしたコミュニケーション～」: 「環境認知」
	5日	第1回リテラシー・セミナー:多様なリテラシーを目指して(不破有理)
	8日	2011 年度キャンパス公開講座「災害とメディア」②(加藤隆、山本品)
	11日	教員サポート「日吉 ITC 情報ネットワーク環境の変更説明会」
	12日	第2回「研究の現場から」原大地、山下一夫
	13日	HAPP 秋の行事「ブラインドサッカー ワークショップ ～五感を生かしたコミュニケーション～」: 「コミュニケーション」
	15日	2011 年度キャンパス公開講座「災害とメディア」③(片山杜秀、佐藤元状)
	19日	教育 GP 関連企画「長編映画ワークショップ中級編 アカデミック・スキルズ3・4」(10月19日、 11月2日、11月9日、11月16日)
	19日	HAPP 秋の行事「Diverta!!」(19日、20日)
	20日	HAPP 秋の行事「Diverta!!」(19日、20日)
	20日	HAPP 秋の行事「ブラインドサッカー ワークショップ ～五感を生かしたコミュニケーション～」: 「チャレンジ精神」
	22日	極東証券寄附講座「サイエンス・カフェ 22」
	25日	HAPP 秋の行事「ブラインドサッカー ワークショップ ～五感を生かしたコミュニケーション～」: 「障がい者理解」
	28日	教育 GP 関連企画「筑前琵琶と語りの世界」
	29日	第2回「社会・地域連携セミナー」なぜSFCから学生主導の地域連携プロジェクトが次々と生まれるか?
29日	2011 年度キャンパス公開講座「災害とメディア」④(龍澤武、山腰修三)	
11	4日	第2回リテラシー・セミナー:多様なリテラシーを目指して(松浦良充)
	5日	2011 年度キャンパス公開講座「災害とメディア」⑤(巽孝之、小木哲朗)
	12日	2011 年度キャンパス公開講座「災害とメディア」⑥(赤江雄一、小室正紀)
	17日	「文学Ⅱ」英語で創作をしてみよう公開ワークショップ&朗読会
	20日～22日	教育 GP 関連企画「フィールドワークに関する追加授業:高山市」
	26日	2011 年度キャンパス公開講座「災害とメディア」⑦(松浦良充、広瀬弘忠)
	28日	ピア・メンター「悪いレポート」展示(11月28日～12月22日)
	27日	教育 GP 関連企画「古楽器で奏でるバロック時代のトリオ・ソナタⅡ」
12	3日	2011 年度キャンパス公開講座「災害とメディア」⑧(高野研一、津田眞弓)
	3日	学会・ワークショップ等開催支援「日本基礎心理学会第30回大会後援と特別講演の共催」(中野泰史)
	3日	2011 年度キャンパス公開講座「災害とメディア」フォローアップ講習(寺沢和洋①)
	7日	HAPP 秋の行事「日吉电影节 2011」(春の行事(延期分))
	10日	HAPP 秋の行事「塾長と日吉の森を歩こう」(春の行事(延期分))
	10日	HAPP 秋の行事「食と農と健康 in 慶應」
	10日	2011 年度キャンパス公開講座「災害とメディア」フォローアップ講習(片山杜秀①)
	17日	2011 年度キャンパス公開講座「災害とメディア」フォローアップ講習(片山杜秀②)
	17日	2011 年度キャンパス公開講座「災害とメディア」フォローアップ講習(寺沢和洋②)
	18日	教育 GP 関連企画「内視」(横山人文研・武藤人文研合同 WS)
	14日	第3回「研究の現場から」吉川龍生、松田健児
21日、22日	教育 GP 関連企画「英語ドラマクラス発表会『カム・ブロー・ユア・ホーン』」	
23日、24日	古典ワークショップ「シェイクスピアで遊ぼう」	
25日	弦楽四重奏セミナー演奏会「ハイドンとモーツァルトの弦楽四重奏曲」	
1	5日、7日	教育 GP 関連企画「ミサ曲口短調」
	13日	教育 GP 関連企画「アーサー王研究会公開発表会 テニス「シャロットの女」の精読から創作へ: 学生創作・発表」
	20日	慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会
	21日	教員サポート「社会で生きる力、人とつながること、遊ぶこと、学生相談室として」
	26日	教育 GP 関連企画「最終年度成果報告会、および外部評価」
		第3回「社会・地域連携セミナー」大学教育と社会地域連携のありかたを考える
2	7日	アカデミック・スキルズ プレゼンテーション・コンペティション
	18日	三田の家イベント「三田秘宝館」関連講演会 震災/障害/性
	18日	教育 GP 関連企画「芝の家コミュニティ講座」
3	11日	教育 GP 関連企画「芝の家プロジェクト発表会 3人寄れば、地域がうごく?」
	18日	みちのく伝統文化伝統芸能支援公演「土海森命」
	28日	教育 GP 関連企画「世界の今を知るための映画上映会+アカデミック・スキルズ映画祭」三田の家

慶應義塾大学教養研究センター
2011年度 活動報告書

2012年8月20日発行
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 不破有理

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-563-1111(代表)

Email lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

編集・制作 慶應義塾大学出版会

印刷・製本 (株)太平印刷社

©2012 Keio Research Center for
Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。

